

[資 料 1]

2024年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

目次

事業目的	1
事業項目	1
概要	2
研究事業の全体構想	2
2024-2026年度の特定奨励費による研究事業の目的	2
研究事業の効果	4
研究事業の実施体制	6
公的研究費の管理・監査にかかわる体制強化	7
特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」	8
特定奨励費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業	11
I. アジア基礎資料研究と重点事業4項目	13
(1) アジア基礎資料研究:研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進	15
(2) 総合的アジア研究データベース:国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築	22
(3) 資料研究成果の発信:国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動	29
(4) 若手研究者の育成:海外機関との学术交流の支援強化	32
II. 資料収集・整理	38
A. 資料購入	38
B. 資料交換	39
C. 図書・資料データ入力	39
D. 資料保存整理	40
III. 資料研究成果発信	41
A. 定期出版物刊行	41
B. 論叢等出版	41
IV. 普及活動	42
A. 研究情報普及	43
B. データベース公開	52
C. 海外交流	52
V. 学術情報提供	53
A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス	53
B. 研究資料複写サービス	54
C. 情報提供サービス	54
D. 展示	54
E. ホームページリニューアル	55
F. 普及広報	56
G. 国際交流	58
H. 研究者の交流および便宜供与のサービス	58
[特別事業]	
2024年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書	62
A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業	62
B. 三菱財団研究助成による事業	64

2024年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 畔柳 信雄

2024年4月1日～2025年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

事業目的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

事業項目

概要	2
I アジア基礎資料研究	13
II 資料収集・整理	38
III 資料研究成果発信	41
IV 普及活動	42
V 学術情報提供	53

概 要

研究事業の全体構想

東洋文庫は、貴重書 1,100 点余を含む欧文図書資料からなるモリソン (G. E. Morrison) コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、1924 年、岩崎久彌によって、アジアに関する貴重図書資料を備えた民間の研究図書館として創設された。以後 100 年にわたり、学術上価値の高いアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、100 万冊を超える蔵書を散逸させることなく保存・管理し、内外の研究者の利用に供してきた。

研究事業の長期的な目的は、アジア現地語資料の収集・整理、貴重図書資料の保存・管理、および公開を継続するとともに、これらの資料に基づくアジア基礎資料研究を推進して、世界のアジア研究の進展に貢献することにある。このような研究事業を 290 名に及ぶ研究員を擁して推進する民間の研究図書館は、世界的に見ても稀である。東洋文庫が 100 年にわたって蓄積してきた特色あるアジア研究を中断させることなく継承し、資料のデジタル化と保存管理を基軸に据え、次の 100 年に向けて発展させていくことは、国内外のアジア研究者が切望するところである。

2024-2026 年度の特典奨励費による研究事業の目的

東洋文庫は、2024 年に創立 100 周年を迎える。これを機に、創設者である岩崎久彌の想い、すなわち貴重図書資料を研究者に自由に閲覧させ、東洋学の深化に貢献するとの考えに立ち帰り、その精神を東洋文庫の各事業に反映させていくことを中期的な目標に据えている。その第一歩として、過去 100 年間に収集した資料、蓄積した専門知識・研究成果等を次世代に継承し、さらに発展させていくため、いかにその土台作りを行っていくかが喫緊の課題となっている。

そこで 2024-2026 年度では、「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を中心テーマに据え、下記の 4 つの研究事業に重点的に取り組む。

(1) アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進	pp. 15-22
(2) 総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築	pp. 22-29
(3) 資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動	pp. 29-32
(4) 若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化	pp. 32-37

これらの研究事業は、個人や複数の研究者が競争的研究費等を活用して行うような短期集中的な研究ではなく、東洋文庫が所蔵するアジアに関する貴重図書資料、現地語資料を対象とした日常的・継続的な基礎資料研究の伝統に根ざすものであり、その維持・継承と研究成果の発信に対する国内外の研究者・関連学界の期待は大きい。そこで東洋文庫では、蔵書の保存・管理・修復、および関連資料の収集に日常的・継続的に取り組み広く公開するとともに、若手・現役および現役を退いた名誉教授クラスの研究者など、世代的にもバラエティーに富んだ研究員がそれぞれの専門分野を活かして、これら蔵書を研究対象とした基礎資料研

究に共同して取り組み、次世代の研究者を育成しつつ、その専門知識・研究成果等を国内外に発信してきた。

東洋文庫では、近年、情報学の専門家の協力を得て研究データベースの国際規格化を推進しており、その成果がデータベースの公開という形で現れ始めている。2024-2026年度はデジタル化の推進だけでなく、デジタルデータを消失させることなく次世代に継承するため、過去に蓄積したデジタルデータの恒久的な保存体制の構築にも重点的に取り組むこととした。

研究成果の発信方法には、研究データベースのほか、国際シンポジウム・ワークショップ等の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリ ERNEST による電子的公開等の方法があり、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。これらの活動の中で若手研究者を育成し、とくに海外機関との学术交流の支援を強化することで、東洋文庫の特色ある研究を中断させることなく、最新の専門知識を獲得・蓄積して次世代に継承し、海外に発信して、東洋学のさらなる発展を目指す。

以上は、東洋文庫が学術研究団体として研究・図書・普及展示の各部分が連携して実施している事業であり、特定奨励費を活用して実施するのにふさわしい事業であると考えます。

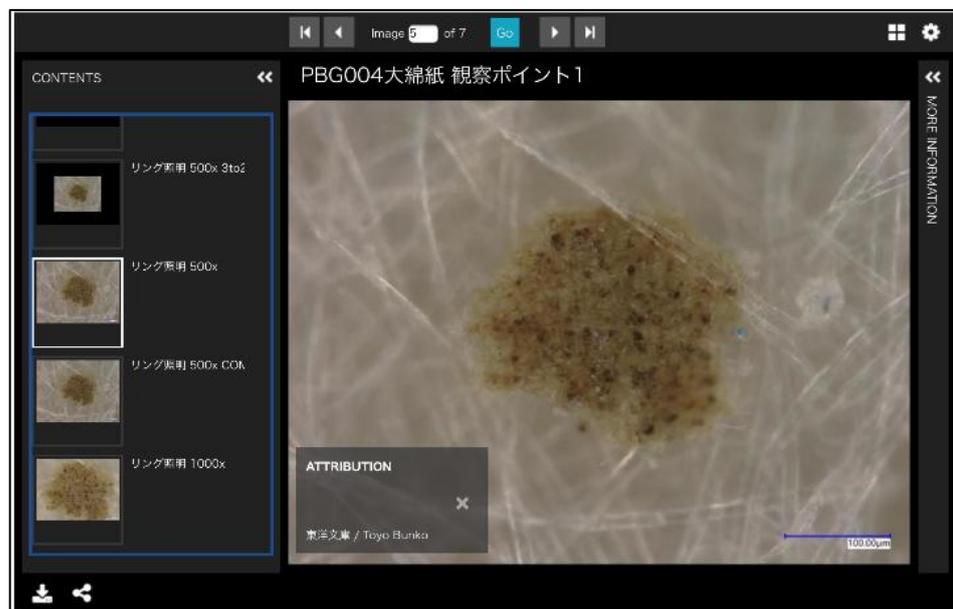
研究事業の効果

本研究事業は、東洋文庫が研究図書館として取り組むアジアに関する資料の総合的研究であり、基礎資料研究、資料収集・整理、成果発信、普及活動の4つの研究項目を立てて推進している。とくに2016年度からは、5つの重点事業（アジア基礎資料研究、総合的アジア研究データベースの構築、国際発信・国際交流の推進、研究成果の刊行・発信の強化、若手研究者の育成）を設定して、3期（第1期：2015-2017年度、第2期：2018-2020年度、第3期：2021-2023年度）にわたって研究活動に取り組んできた。

2024年度は新たなスタートラインとして、「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を中心テーマに掲げ（pp.2-3「2024-2026年度の特典奨励費による研究事業の目的」を参照）、研究データベースを主軸に据えている。その目的は研究データベースを構築すること自体にあるのではなく、前3期に蓄積された経験と研究成果を土台に、若手研究者を育成しつつ、国際性・継承性を確保した状態で研究成果を保存管理し、国際的に情報発信する点にあり、主役はあくまでアジアの貴重図書資料に対する基礎資料研究である。そこで、紙質分析研究と、その資料保存を例に、本研究事業の当該研究分野に対する貢献度、期待される成果を記述する。

I. アジア基礎資料研究

東洋文庫は、伝統的な歴史・文化研究によって蓄積された専門知識・研究成果を土台に、総合アジア圏域研究班が各研究班と共同して、「研究環境の多様化」（pp.8-9「特典奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」」の「2021年度進捗状況確認」を参照）に対応しつつ、新しい視点・発想での研究に取り組んでおり、その研究活動は、近年、学際的な広がりを見せている。最も特色ある研究の一つが文理融合型の紙質分析研究であり、東洋文庫が所蔵する古今東西の貴重図書資料を対象に、精密顕微鏡を用いた調査を継続的に行っている。蓄積した画像データはIIIF形式で保存し、分析結果をメタデータとして「紙質分析データベース」に登録する（下図）。これを書誌情報の一つとしてOPACシステムと連携させ、かつ貴重図書資料の保存修復を行う際の紙料情報として活用する。



II. 資料収集・整理

資料の保存修復は、現在、モノとしての書物の保存とデジタルデータとしての保存の 2 つの側面を持っている。書物のデジタル化は、閲覧利用による書物の負担を低減し、モノとしての書物の保存にとってもプラスに働く。「紙質分析データベース」に登録された紙料に関する情報と、2021-2023 年度に構築を開始した「過去の修復記録データベース」とを複合的に活用し、書物の作成された地域、年代、素材、製本方法等に応じた最適の保存修復の方法を導き出す。なお、右図は、修復記録のほか展示記録、書誌、研究の連携データベースのプロトタイプ版の一画面。これに紙質分析データベースを連携させる予定。

タイトル	目録内資料記述	展示会ID	展示開始年月日	展示終了年月日
文選 巻第四十八 (嵯峨飛鳥江記至巻末) (金澤本) 寫本 (平安朝時代の書寫) (区部内長七寸一分) 一軸	[創立記 念展示]		1924/11/29(土) -12:00	1924/11/30(日) -12:00

III. 資料研究成果発信

東洋文庫が過去 100 年間蓄積した修復記録と、過去 3 期にわたって蓄積した紙料データは、様々な地域・年代で作成された資料を保存修復する際の最適解を導き得る。そこで、セミナー・ワークショップ等の開催や、「紙質分析データベース」と「過去の修復記録データベース」の公開を通して、東洋文庫の経験とデータを国内外の研究機関に積極的に発信する。

IV. 普及活動

これらの研究成果は、東洋学講座や東洋文庫ミュージアムでの展示等の機会を活用し、専門家だけでなく、広く一般に向けて普及する。これは紙の修復に関する知識の普及にとどまらず、ひいてはアジア研究に対する一般の関心・理解を深めることに繋がる。さらには紙とアジアの深いつながりに対する社会的な関心を喚起し、将来的なアジア研究の継承・発展に貢献することとなる。

東洋文庫が2023-2027年度にかけて取り組む「100周年記念事業」は短期集中的、かつ大規模な活動である。これに対し、特定奨励費による事業はより長期的・経常的な活動である。100周年記念事業では、特定奨励費によって過去に蓄積してきた土台を一気に嵩上げる。特定奨励費ではこの土台にしっかりと根を張り直し、これまで以上に高いレベルで、紙質分析研究をはじめとするアジア基礎資料研究に取り組む。それによって、東洋文庫が100年間にわたって蓄積してきた特色あるアジア研究を中断させることなく継承し、資料のデジタル化と保存管理を基軸に据え、次の100年に向けて発展させていく。上記の研究事業は、国内外のアジア研究者の期待に応え、貢献するものとなると考えている。

2024年度の事業において、どのような効果があったかについては、それぞれ下記の項目で説明する。

I	アジア基礎資料研究	pp.13~37
II	資料収集・整理	pp.38~40
III	資料研究成果発信	pp.41
IV	普及活動	pp.42~52

研究事業の実施体制

東洋文庫は、「定款」(<https://toyo-bunko.or.jp/wp-content/uploads/2024/03/00-2013-Teikan.pdf>)第3条・第5条に規定するとおり、「東洋に関する図書を収集し、アジア全域及び北アフリカを対象とする東洋学の研究及び普及を図り、学術・文化・芸術の振興に寄与する事」を目的とする研究図書館として、研究部・図書部・普及展示部が協同して、下記の諸事業を行う。

- (1) 図書の収集・整理・保存を行い、閲覧室の設置・運営と電子化による公開、及び蔵書複写等提供による普及
 担当部署：図書部
 事業計画書：II 資料収集・整理、IV 普及活動(B. データベース公開)、
 V 学術情報提供(A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス、B. 研究資料複写サービス)
- (2) 東洋学の研究活動と、その為の講演会・研究会等の開催、及び研究成果の発表と有益な図書の制作・配布
 担当部署：研究部
 事業計画書：I アジア基礎資料研究、III 資料研究成果発信、
 IV 普及活動(A. 研究情報普及)、V 学術情報提供(C. 情報提供サービス)
- (3) 図書・資料の展示とその付帯施設の運営
 担当部署：普及展示部
 事業計画書：IV 普及活動(A. 研究情報普及)、V 学術情報提供(D. 展示)

(4) 不特定多数への普及の為の講習会・展覧会等の開催

担当部署： 研究部・図書部・普及展示部

事業計画書： IV 普及活動(A. 研究情報普及)、

V 学術情報提供(D. 展示、E. 普及広報、F. アカデミア)

(5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

担当部署： 研究部・図書部・普及展示部

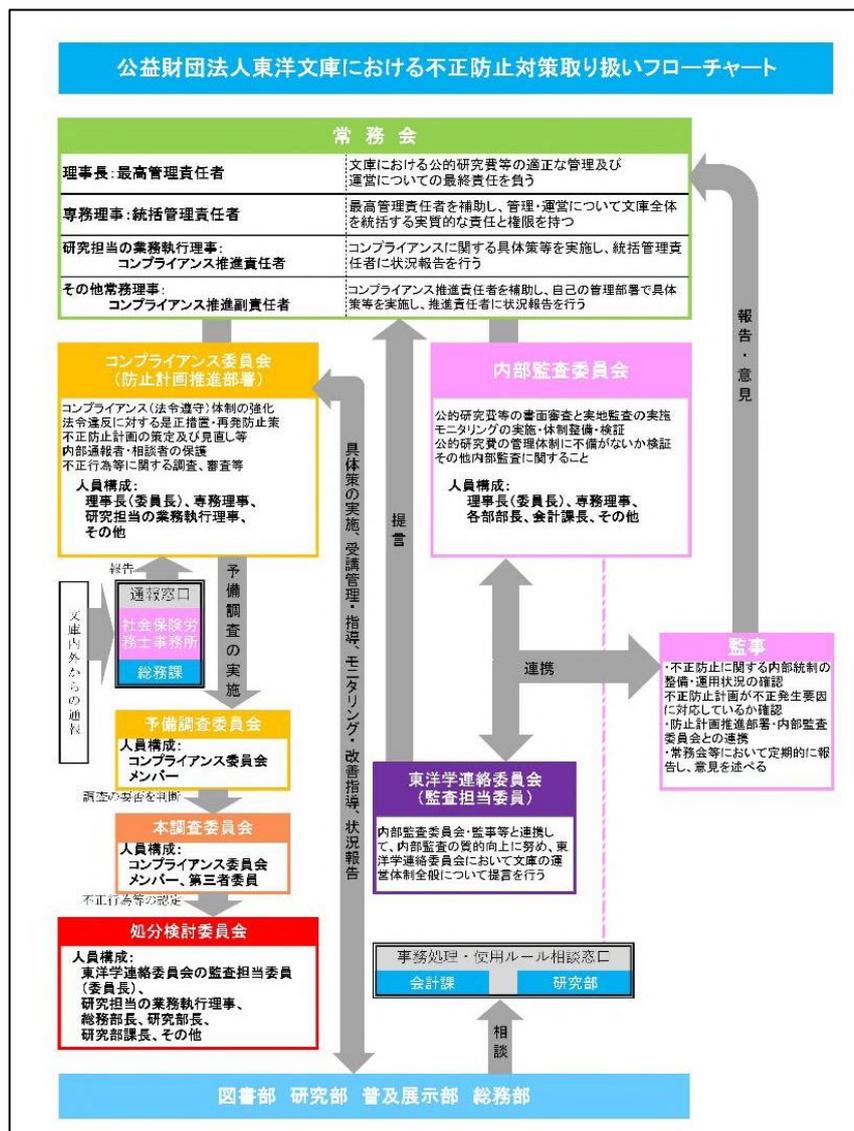
事業計画書： IV 普及活動(C. 海外交流)、

V 学術情報提供(G. 国際交流、H. 研究者の交流および便宜供与のサービス)

公的研究費の管理・監査にかかわる体制強化

2021年2月1日に「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」(平成19年2月15日文科科学大臣決定)が改正された。その趣旨および内容を踏まえ、2021年度において、公的研究費等にかかわる不正防止に関連する規定・規約の類の全般的な見直しを行うとともに、監事との連携を強化し、さらに大学等研究機関において副学長・常務理事等の役職を経験し、機関全体の監査業務の経験がある者を東洋学連絡委員会の「監査担当委員」に任じ、内部監査委員会・監事等と連携して、内部監査の質的向上に努めるなど、より実効性のある体制整備に取り組み、ガイドライン改正への対応を一つの契機とした不正防止対策の抜本的な改革を実施した。

2022年度以降、この体制のもと、引き続き全構成員に対するコンプライアンス教育・啓発活動を、組織の隅々まで行き渡る方法で実施して、不正を起こ



させない組織風土の形成に取り組みつつ、さらなる体制の整備・強化とそれによる実効性の確保を目指す。東洋文庫の不正防止対策の取り扱いに関するフローチャートは前頁を参照。

具体的には、年1回、不正防止計画・研究倫理等に関するオンライン説明会を開催し、四半期に1回、日本学術振興会・文部科学省が公表している不正事例を題材に独自の資料を作成して啓発活動を行っている。また、年2回コンプライアンス委員会を開催し、監事等からの提言をもとに計画の見直しを行っている。

特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」

2021年度進捗状況確認

(指摘事項)

①本研究事業の目的として「(1)アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」が掲げられているが、「新展開」とは何を目指しているのかが曖昧なため、その内容を明確にした上で進捗状況を御説明いただきたい。

②本研究事業の目的の一つである「(5)若手研究者の育成」の一例として、状況報告書3ページに「情報工学研究室と共同で情報学を専門とする大学院生に対して、東洋文庫のデータベース化事業に関する講習会や検討会を開催し、共通の関心を高める活動を行う」との記載があるが、具体的にどのような活動を行ったのか御説明いただきたい。

③本経費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業をどのように整理しているのか御説明いただきたい。

(対応状況)

①東洋文庫のアジア基礎資料研究は100年の伝統の中で培われてきたが、これを墨守するだけでなく、時代の変化に応じて、常に従来の研究手法の見直しと再構築に取り組んできた。本研究事業に掲げる「(1)アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究」における「新展開」とは、資料を取り巻く環境の変化に端を発するものである。

2020年にハーバード・エンチン研究所と共催した国際シンポジウム「テキストとしての書物、目的としての書物—アジアとヨーロッパにおける知の生産・流通・収集」では、文献研究が内容解読だけでなく、書物の起源、素材・製作工程等その研究対象が多岐にわたることが示された。従来の文献研究では主に文字資料を扱ってきたが、近年、地図・写真・動画、資料の素材分析等を対象とした総合的な研究が求められるようになり、さらに人文情報学の進展によって、これらを複合的に活用したデータベース自体が新たな資料の形態として注目されている。このように「資料形態の多様化」に伴い、文献研究のテーマも拡大してきている。

近年、ビッグデータの迅速な分析と活用が社会的な課題となり、人文学の研究分野でも文字資料以外の多様なデータ(地図・写真・動画等)を情報学の専門家と協同してデータベース化し、これを視覚的に表現すること、すなわち「資料表現のビジュアル化」が求められている。これにより資料に対する理解度を高めて総合的な活用が可能となり、資料の比較や新たな編集が容易となる。これによって属人的な研究を超え、国内外の研究者間の共通理解を深め、研究の効率を高め、視野を広げ、一般にもわかりやすく発信できるようになる。

2022年4月の個人情報保護法の改正により、研究における個人情報の取り扱いが重要な課題となっている。とくに写真や動画に含まれる肖像権に対する配慮が必要となり、「資料に付随する権利の多様化」が生じた。そこで東洋文庫では、全研究員に人権と肖像権に関するアンケートを実施し、デジタルアーカイブ学会や国立情報学研究所等が提供するガイドライン

等を参考に独自の指針を策定し、諸規程を整備した。さらに研究倫理委員会で肖像権に関する基準を説明する等、構成員の意識の向上に努めてきた。これらの措置によって研究活動において人権や肖像権を尊重し、個人情報を適切に取り扱うための枠組みを整備した。

資料の保存方法がデジタル技術の発展によりマイクロ資料から電子データに移行し、IIIF規格の普及により情報交流が国際的に進展している。電子データの急拡大と記録媒体の劣化に対処するため「資料保存の多様化」が起り、資料保存のために様々な技術とインフラが必要となっている。

総じてアジア基礎資料研究は、グローバル化の動きの中で、これまでの制度化や近代化等の統一的なアプローチではなく、在地化 indigenization や地方化 localization 等に焦点を当てた研究に大きな関心が寄せられ、「資料研究の多様化」が起きている。

これら資料を取り巻く環境の変化の相乗効果によって、これまでの資料調査、資料収集、資料交流、資料保存や資料研究に対して、新たな対応、つまり「新展開」が求められるようになっている。

東洋文庫が特定奨励費の研究事業で取り組むアジア基礎資料研究と研究データベースの構築は密接不可分な関係にあり、それぞれが研究の入口（発端）ともなり、出口（成果）ともなりうる。

すなわち、東洋文庫では、文字資料のみではなく、研究データベースという、デジタル化に基づく総合的な資料研究と研究表現を追求しており、そこでは文字資料や地図・写真・動画等の多様な資料形態を取り込みながら、多様な研究に資する資料研究を追求している。その成果として、すでに「東洋文庫水経注図データベース」(<https://static.toyobunko-lab.jp/suikeichuzu/>)や「東洋文庫「大明地理之図」データベース」(<https://static.toyobunko-lab.jp/daiminchiru/>)を構築・公開している。これらの作成過程において若手研究者の協力を得ることで、若手研究者が国際規格によるデータベース構築に関するノウハウを学ぶ場ともなっている。

現地研究機関との共同研究における新展開については、データベース化した資料を活用して、より系統的かつ総合的な資料活用の便宜を向上させることに努め、海外の研究グループとの共同研究に取り組んでいる。一例を挙げれば、東洋文庫所蔵の河口慧海将来のチベット写本大蔵経を対象に、ライデン大学のシルク教授、ウィーン大学のタウシャー教授の研究グループとの共同研究を進め、その成果である書誌情報と解説、参考文献を付した形で、2021年度に『宝積部』全6巻、2022年度に『華嚴部』全6巻の画像を閲覧できるデータベースを構築して一般公開した(https://app.toyobunko-lab.jp/s/manuscript_kanjur/page/home)。

今後、書誌(Toyo Bunko OPAC)、画像(Toyo Bunko Media RepositoryでのIIIF公開)、研究成果(東洋文庫リポジトリERNEST)等を連動させ、資料環境の多様化に対応するための取り組みを推進していく。

②データベースの継続的な構築・利用のためには若手研究者の育成が急務である。東洋文庫では、従来、研究員の紹介等の方法で東洋文庫の奨励研究員に任命するなどして若手研究者の育成に取り組んでいる。情報学を専門としながらも人文学の素養を持つ若手人材の育成については、研究データベースの構築に協力いただいている研究協力者等を通じて、継続的に人材を探し求めている。

その一環として、情報学を専門とする大学院生等にも広く参加を呼びかけて、毎年度、研究データベース会議を開催している。2021年度は東洋文庫で研究データベースの構築に携わる研究員・研究協力者による報告を行い、2022年度は研究図書館のデータベースの重要要素である「画像」「テキスト」「検索システム」の課題に取り組む研究員・研究協力者による

報告を行った。会議には内外の大学等研究機関でデータベースの構築に携わる研究者の参加を得、今後の研究データベースの拡充・発展にとって有益な提言等を得、若手研究者にとっても貴重な機会となった。東洋文庫には過去100年にわたって蓄積された多種多様な研究データがあり、情報学を専門とする若手研究者がこれらを素材として活用して、データベース構築の経験を積む場としても門戸を開いている。

その他、国内では国立国会図書館関西館、海外ではハーバード・エンチン研究所等と所蔵資料のデジタル化・データベース化にかかわるワークショップ・研究会等を共催したり、研究データベースの構築の際に若手研究者の参加を積極的に促し、技術の習得・ノウハウの伝承につとめるなど、あらゆる場面を活用して人材育成を図っている。

③東洋文庫では、特定奨励費と他の研究費の用途を明確に区別し、特定奨励費ではアジア各地域に関する着実かつ基礎的な資料研究をさらに深化させていく持続的な研究活動に使用しており、その成果である研究データベースの作成、成果物の刊行、資料の収集・保存・公開等に取り組んでいる。その他の研究費等（科学研究費等の競争的資金、各財団助成金、寄付金等）では個々の研究者が自由な発想に基づいて、特定奨励費では取り扱っていない初期段階の研究や特定の研究課題に取り組むために使用している。研究部執行部の責任において、研究員個人や研究グループに対して、上記の方針を周知徹底し、特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けの厳格化に努めている。

2022年度進捗状況確認

(指摘事項)

事業目的(1)にある「現地研究機関との共同研究の新展開」について、どの現地機関と、どのような内容で研究が新展開されているかの説明については、個別事例は記載されているが、全体としての件数や対象機関を包括的に整理して示すなど、改善の余地がある。また、事業目的(5)にある「若手研究者の育成」の成果についても、研究者として自立できた人数を示す等、より明確に成果を示すことが望ましい。

(対応状況)

①事業目的(1)の「現地研究機関との共同研究の新展開」について、研究班別の対象機関を一覧表化すると、下記のとおり。

研究班	2021年度	2022年度	2023年度
総合アジア圏域	Harvard Yenching Institute	Harvard Yenching Institute	Harvard Yenching Institute
	St Anne's College, Oxford	St Anne's College, Oxford	St Anne's College, Oxford
	中央研究院近代史研究所	中央研究院近代史研究所	中央研究院近代史研究所
	フランス極東学院	フランス極東学院	フランス極東学院
現代中国研究班	華東師範大学中国当代史研究中心	華東師範大学中国当代史研究中心	華東師範大学中国当代史研究中心
	上海国際問題研究院	—	中国社会科学院
	—	—	University of Cambridge
東北アジア研究班	吉林師範大学満学研究院	吉林師範大学満学研究院*1	中央民族大学歴史文化学院*2
中央アジア研究班	IOM RAS*3	—	—
	国際テュルク・アカデミー	国際テュルク・アカデミー	国際テュルク・アカデミー
チベット研究班	Universiteit Leiden*4	Universiteit Leiden*4	Universiteit Leiden*4
	Universität Wien*4	Universität Wien*4	Universität Wien*4
	—	—	British Library
東南アジア研究班	ベトナム社会科学院漢喃研究所	ベトナム社会科学院漢喃研究所	ベトナム社会科学院漢喃研究所
西アジア研究班	—	ボン大学奴隷・従属研究センター	フランス国立科学研究センター等*5
東アジア資料研究班	中央研究院歴史語言研究所	中央研究院歴史語言研究所	中央研究院歴史語言研究所
合計(件)	13	12	15

*1 2022年度、先方の組織改編のため、満学(とくに清朝史、言語学、民族学)の共同研究が停滞。

- *2 吉林師範大学満学研究院との共同研究停滞を受け、新たに清朝史研究のための協定の締結を調整中。
- *3 Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences の略。中央アジア出土ウイグル文書の共同研究を進めていたが、2021年12月に先方からの一方的通達により中断。
- *4 ライデン大学シルク教授の研究チーム (Open Philosophy)、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループとの「河口慧海請来写本大蔵経」の共同研究。
- *5 文書資料のデータベース化にもとづく比較制度研究において、フランス国立科学研究センター (CNRS) の他、トルコの Research Centre For Islamic History, Art and Culture (IRCICA)、国立シンガポール大学、ウズベキスタン科学アカデミー等の研究者との連携を計画。

なお、2021年度・2022年度においては、この他にも海外研究機関との共同研究を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大のため実施を見合わせたものが少なくなかった。2023年度は5月の新型コロナウイルスの5類移行を受け、海外研究機関との交流が再開し始めており、研究部執行部としても各研究班の国際的な研究活動に対する支援体制を強化した。

②事業目的(5)の「若手研究者の育成」について、研究者として自立した者、および研究者としての自立に向けて支援中の者を、年度別に一覧表化すると、下記のとおり。

研究者として自立した者	2021年度	2022年度	2023年度
東洋文庫で正職員に採用した者*1	1	1	1
他の大学等研究機関で研究職に就いた者*2	1	3	2
合計(人)	2	4	3

*1 うち2名は嘱託研究員、1名は臨時職員からの採用。

*2 うち3名は臨時職員経験者、2名は研究協力者、1名は研究会参加メンバー。

研究者としての自立に向けて支援中の者	2021年度	2022年度	2023年度
嘱託研究員	5	3	2
奨励研究員	6	5	6
科研費応募者*3	(2)	(2)	(0)
科研費採択者*3	(1)	(3)	(3)
海外協定機関との交流等を支援した者*4	(0)	(1)	(1)
日本学術振興会特別研究員PD	1	1	2
合計(人)	12	9	10

*3 2021年度は2名が応募して不採択となり、他機関からの移管で1名を受け入れた。2022年度は2名が新規採択、1名が継続、2023年度は3名が継続。

*4 槇原研究奨励金(海外協定機関での調査等のための給付型奨励金)を給付。

特定奨励費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業

特定奨励費については、東洋文庫の伝統的なアジア基礎資料学を継承・発展させるため、東洋文庫が所蔵する和漢洋の古典籍の保管・修復・公開、ならびにアジア各地域に関する一次資料の継続的かつ系統的な収集・保存・公開、さらにそれらを活用した基礎的かつ長期的なアジア基礎資料研究を実行していく上で、不可欠の補助金であると考えている。

この特定奨励費が途絶えた場合、一次資料に特化した資料の収集・保存・公開、広くアジア全域を対象とした伝統的かつ組織的研究、過去の研究蓄積を活用した国内外への研究情報

発信など、東洋文庫が国内外の研究機関に対して果たしてきた重要な役割が継続できなくなり、かつ他に類似の研究機関が存在しないことから、日本、ひいては世界のアジア研究が大きく停滞しかねない。

例えば、中央アジア研究においては、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所(IOM)との協力関係・信頼関係のもと、20年間にわたり共同して、中央アジア出土のウイグル文書について、目録の編集刊行・改訂に取り組んでいる(2021年12月よりロシア側の事情により中断)。同様に、協力協定機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院等との間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって行われる調査研究は、特定奨励費においてのみ行うことが可能である。

東洋文庫では、このように特定奨励費に基づいた持続的な研究活動を中心としつつ、研究員個人や研究グループが不定期にその他の研究費等(科学研究費など競争的資金、各財団助成金、寄付金等)を獲得している。特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けについては、下記のように整理している。

特定奨励費では、東洋文庫が学術団体として研究員・研究班が一体となって取り組む研究事業を実施している。具体的には、アジア各地域に関する着実かつ基礎的な資料研究をさらに深化させていく研究や、その成果である研究データベースの作成、成果物の刊行、資料の収集・保存・公開に取り組んでいる。研究計画の立案、実施状況の確認・評価・見直しについては、研究班の代表者からなる研究部運営委員会で検討のうえ、外部諮問委員会である東洋学連絡委員会による審議を経るなど、常にブラッシュアップをはかっている。

その他の研究費等については、特定奨励費では取り扱っていない研究対象・研究課題や、特定奨励費の研究テーマの中から、さらに焦点を絞った研究課題について、個々の研究員が各自の自由な発想や好奇心に基づいた研究に取り組むために活用している。とくに研究の初期段階にあって不確定要素のある研究や、個別的・短期的な研究、あるいは準備段階を終えて研究の加速化・大規模化のために多量の研究費が必要な研究に対しては、その他の研究費等を活用する方針を2016年度に策定し、特定奨励費との棲み分けを実施している。

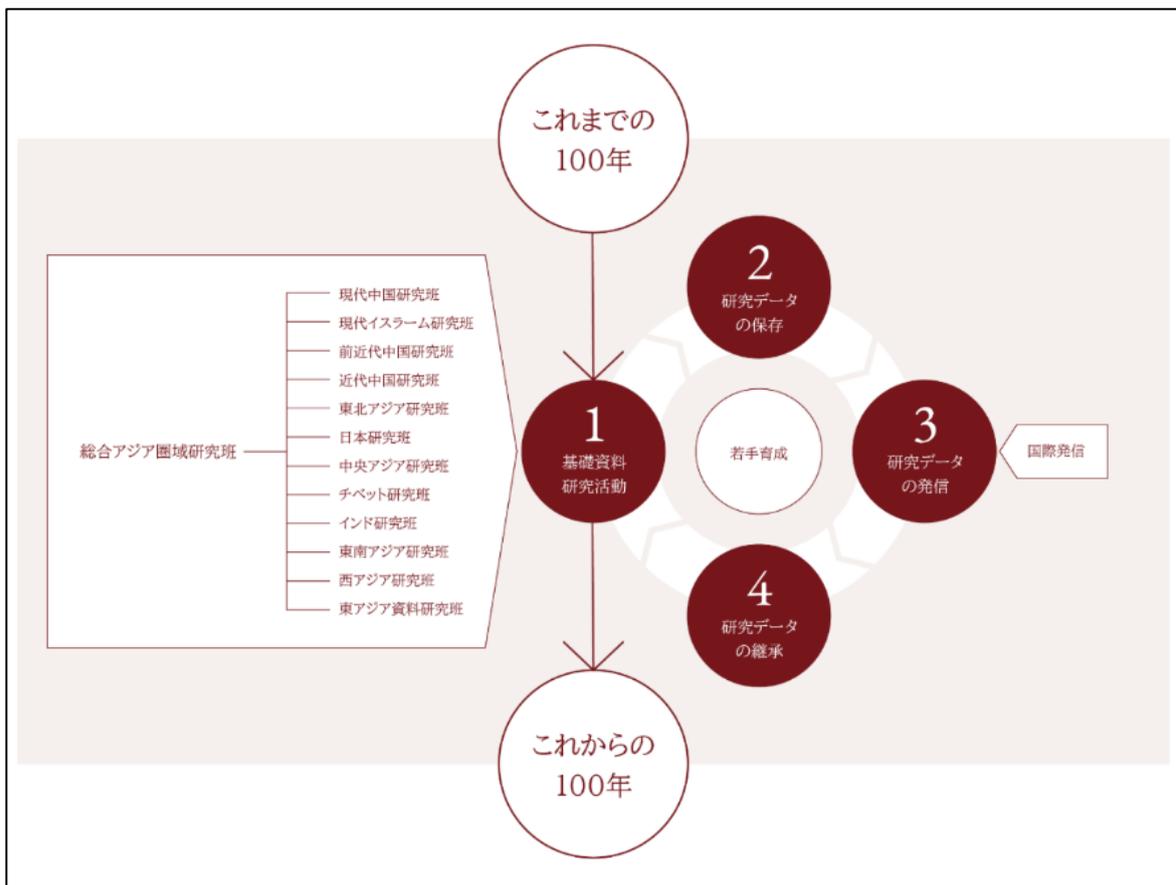
研究データベースを例にとれば、研究グループから提案された計画は、研究データベース会議における議論を参考に、研究部の研究データベース担当が内容・実施計画を吟味した上で、特定奨励費の研究計画に盛り込むべきか、その他の研究費等に応募して取り組むべきかを判断している。そこでは、上記に示すように、計画の規模、計画の熟成度、データベースの汎用性、研究部が定める「研究データベース」としての条件の達成度等を総合的に評価したうえで判断するとともに、作成過程における各段階においても到達度が検討され、大規模な研究機関とは異なる東洋文庫としての特徴ある研究データベース構築を目指している。

今後、研究部執行部の責任において、研究員個人や研究グループに対して、上記の方針をより一層周知・徹底し、特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けの厳格化に努めていく。

I. アジア基礎資料研究と重点事業4項目

2021-2023年度の研究事業では、重点事業の第一に「アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」を掲げ、資料を取り巻く5つの研究環境の変化、すなわち資料形態の多様化、資料表現のビジュアル化、資料に付随する権利の多様化、資料保存の多様化、資料研究の多様化、に端を発する新規事業に取り組んだ（詳細はpp.8-9「特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」」の「2021年度進捗状況確認」を参照）。

2024-2026年度もこれらの研究環境の多様化に対応しつつ、総合アジア圏域研究班を中心に他の研究班と連携して、従来の①「基礎資料研究活動」、②「研究データの保存」、③「研究データの発信」というサイクルで特色あるアジア研究を継承・発展させつつ、2023年3月開催の研究データベース会議の経験を踏まえ、新たに④「研究データの継承」を加え、恒久的な保存体制の構築を目指す（下図）。



①「基礎資料研究活動」では、100年間に渡る東洋文庫の伝統的なアジア研究を継承・発展させるため、13研究班が20の研究テーマ（次頁図）を設定して、蔵書資料の調査に基盤を置いた基礎資料研究に継続的に取り組む。

総合アジア圏域研究班を中心に、従来の紙質分析、歴史地図研究、コルディエ文庫研究、旅行記研究等に加え、2024年度に東洋文庫が100周年を迎えることを機に、東洋文庫アーカイブ（草創期の文書・書簡等）の整理・分析を行い、とくにモリソン文庫の保存管理の現状と課題に焦点をあてて調査を進める。

【研究班と基礎資料研究テーマ】

No.	研究班	基礎資料研究テーマ
1	総合アジア圏域	総合的アジア研究データベースの発展と継承
2	現代中国	現代中国の総合的研究（6）
3	現代イスラーム	現代中東・中央アジアの政治史・社会史とデジタル資料
4	前近代中国	『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討
5		東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究
6		中国社会経済・基層社会用語シソーラス (thesaurus) の構築
7		中国近世の法と社会の構造解明
8	近代中国	20世紀日本の中国調査研究機関に関する総合的研究
9	東北アジア	近世朝鮮研究資料の基盤的データベース構築
10		清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究
11		清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化
12	日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究（6）
13	中央アジア	中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究
14		中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究
15		日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信
16	チベット	チベット語資料研究データベースとチベット文化の継承
17	インド	インド古代～近世における文書資料の研究
18	東南アジア	近世後期の東南アジアをめぐる旅行記史料の研究
19	西アジア	文書資料のデータベース化にもとづく比較制度研究
20	東アジア資料	東アジアにおける民族芸能資料の研究

②「研究データの保存」では、「基礎資料研究活動」によって新たに生成された研究データを、より汎用性の高い状態で保存・管理するべく、画像共有のための国際規格IIIF (International Image Interoperability Framework)、テキストデータの共有・継承のための国際的なガイドラインTEI (Text Encoding Initiative) の導入を継続する。具体的には、総合アジア圏域研究班の研究データベース共同研究グループが中心となり、N-gramによるテキストマイニングのアジア基礎資料研究への応用（中塚亮奨励研究員）、『水経注図』データベース（2021年度公開）への『水経注疏訳注』索引データの取り込み（前近代中国研究班）、近世朝鮮文献ポータルサイトの構築による日本の近代朝鮮史研究における資料状況の可視化（東北アジア研究班）、蔵書・画像・研究・保存修復記録・展示記録・紙質分析等の各データベースの連携（2021-2023年度の計画を継続）等に取り組む。東洋文庫アーカイブの画像とメタデータを連携させ、「100周年デジタルアーカイブ」として公開する。

③東洋文庫では国際シンポジウム・ワークショップ・講演会の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリERNEST (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>) での電子的公開、研究データベースの公開等の方法で、研究活動の結果得られた専門知識・成果の発信、すなわち「研究データの発信」に努めてきた。このうち国際シンポジウム等の報告内容を論文化して出版し、それをPDF形式にてERNEST上で公開する、という一連の流れが形成されつつある。そこで、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。

④2015年度以来、東洋文庫では「総合的アジア研究データベースの構築」をテーマにデジタルデータの国際規格化を導入し、着実に成果を上げてきた。その一方、過去に作成した大量のデジタルデータをいかに継承するかが深刻な問題となっている。そこで「研究データの継承」のサイクルを新たに組み込み、デジタルデータの記録媒体の劣化・故障等に備え、記録媒体の点検・管理・マイグレーション（記録媒体の更新）を計画的に実施し、クラウドサーバも活用して長期保存が可能な体制の構築を目指す。また、2020年度より運用している専用サーバを増強しつつ、寿命による故障に備え、2025年度を目処にサーバの交換を行い、クラウドサーバと相互補完的に運用する。

上記の新たな研究活動のサイクルを稼働させる中で、研究データベースの構築や国際シンポジウムの運営等の機会を通して若手研究者を育成し、日本学術振興会特別研究員PD・奨励研究員・嘱託研究員へとステップアップさせ、科学研究費の獲得等を経て研究機関への就職に繋がるよう支援する。とくに2022年度に創設した榎原研究奨励金や、学術交流協定を結ぶHarvard-Yenching Instituteの各種プログラム等を活用して海外機関での資料調査・学術交流をより一層支援する。

東洋文庫では2024年に創立100周年を迎えるにあたり、2023-2027年度の期間、「100周年記念事業」として、基礎的なインフラ全般の点検・整備・増強等を重点的にを行い、次世代に東洋文庫の諸活動を継承・発展させるための事業を展開している。特定奨励費では「100周年記念事業」と連携・連動しながら、「2024-2026年度の特定奨励費による研究事業の目的」(pp.2-3)に掲げた4つの重点事業、(1)アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進、(2)総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築、(3)資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動、(4)若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化、に取り組む。

(1) アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、太田啓子

東洋文庫には290名におよぶ研究員が所属し、東は日本から西は中東までのアジアの全域および北アフリカまでに及ぶ諸地域の歴史・社会・文化を対象として、地域研究の手法を用いて研究に取り組んでいる。研究班・研究グループは地域やテーマに基づいて組織され、アーカイブを含む文献・地図・写真・動画等の諸資料について研究を進めている。

資料のデジタル公開等による図書館の電子化が進む中、資料の現物（書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等）からしか読み取れない情報（紙・墨等の素材や生産された時代・地域等）を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

そこで、総合アジア圏域研究では、今期の中心テーマたる「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を実行に移すため、新たに設定された4つの重点事業項目に対して、総合アジア圏域研究班が中心となって、すべての研究班・研究グループとの協同のもと、時代縦断的、地域横断的な研究活動を推進する体

制を構築する。これら人文的研究手法に、情報学の専門家によるデジタル技術を組み合わせることで、文理融合型アジア資料学の道を探求しつつ、アジア基礎資料研究と総合的アジア研究データベースの発展と継承に取り組む。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、「総合的アジア研究データベースの発展と継承」をテーマに、下記の研究に取り組んだ。

<紙質調査>

紙質のデータの蓄積に努め、計385枚の紙質データを取得した。また、東京文化財研究所および実践女子大学文芸資料研究所の紙質調査グループと緊密な交流を行い、非破壊分析方法の改良を模索した。文理融合型人文科学研究の普及のため、徐小潔研究員が雑誌『東京人』（都市出版）2024年11月号にて東洋文庫の紙質調査研究を紹介した。

<古地図研究>

2025年3月、東洋文庫所蔵『大明地理之図』4軸（故細谷良夫研究員寄贈）との比較研究のため国内外の機関での調査・研究に向けた検討を行った（「研究班と基礎資料研究テーマ」のNo.1（p.14参照）。以下「No.*」と記す）。

現代中国研究では、No.2「現代中国の総合的研究（6）」をテーマに、政治・外交、経済、国際関係・文化、資料の4グループが相互に連携しながら研究活動に取り組んだ。政治・外交グループは国際研究・セミナーを活発に行い、日本の研究を世界に広めると同時に、国内外の研究者との交流を推進した。経済グループでは東京大学社会科学研究所にて第二汽車製造廠に関する資料に関する打ち合わせを行った。国際関係・文化グループは2024年6月に華東師範大学から研究者2名を招聘して第1回日中現代史研究交流会を開催した。資料グループは、モリソンコレクション形成の背景にある人的・知的ネットワークや歴史的・文化的事情の解明を目標に研究活動を進めた（No.2）。

現代イスラーム研究では、中東・北アフリカおよび中央アジア地域における立憲主義および立憲体制の資料調査および文献研究をさらに継承・発展させるべく活動を実施した。「中東・中央アジア諸国基本法令 日本語データベース」の継続的公開のため、「1979年イラン革命憲法」、「1921年トルコ国憲法」、「1924年トルコ共和国憲法」および「1861年チュニジア憲法」の厳密な翻訳作業を継続して実施した。また2025年2月24日-25日に研究班の4地域研究グループで合同研究集会を開催した。初日にはイラン・エジプト・チュニジア・トルコの憲法および「法の近代化」について報告を行い、各グループでの憲法翻訳作業をめぐる具体的な課題と問題意識の共有を試みた（No.3）。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

前近代中国研究班のうち「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループでは、文献史料の精密な理解と新出史料を利用した研究を両軸とした中国古代史研究の深化を目的に、原則月2回オンライン形式（対面も併用）で研究会を開催した。

『水経注疏』巻10漳水篇の訳注本の刊行作業と並行して、新たに『水経注疏』巻13漂

水篇に取り組んで順調に研究を進めた。また、中国古代地域史研究に資する重要史料の解明に向けての基礎的作業として、研究協力者である若手研究者を中心にオンライン方式により『嶽麓秦簡(参)』所収の始皇帝時代の裁判記録、ならびに『嶽麓秦簡(肆)』所収の同じく始皇帝時代の律令条文の講読を月1～2回の頻度で開催した。同時に2025年度刊行予定の論文集の準備を進めた。国際交流については、研究滞在中の研究者や留学生が研究会に参加し、成果刊行にも協力を得たほか、国外研究者との連絡を絶やさぬように努めた(No.4)。

「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、韓国の現地調査を行い、慶尚北道慶州市の金尺里古墳群や皇南洞120号墳等、朝鮮三国時代新羅の積石木槨墓の発掘調査現場を見学した。あわせて国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、東亜細亜文化財研究院等にて新羅・加耶の出土遺物に関する資料調査を行った。これによって朝鮮三国時代の最新資料を入手することができた。中国大陸の漢代～魏晋南北朝時代、および朝鮮半島の原三国～三国時代の発掘調査報告書の収集を継続した(No.5)。

「中国社会経済・基層社会用語シソーラス(thesaurus)の構築」グループでは、中国史の史料学における基礎作業として、これまで重点的に取り組んできた【基層の社会経済についての用語解の編纂とデータベース化】の作業が集約の段階を迎えつつある。その研究成果を踏まえ、根本史料に即しつつ前近代中国の歴史の実態、実相を復元して学界に提供することを目的に、これまでの作業をさらに深め、とくに基層社会の史料を詳細に考察することにも重点を置く。今日、旧中国の伝統文化・経済史・社会史・法制史に関心を持つ研究者・読者は増加しているが、既存の辞書のほとんどは伝統漢学を讀解する工具として編纂されており、世相の実態、真相についての知識を求める人々が、随時座右に参照できる用語解、術語解はこれまで存在しなかった。東洋文庫では創設以来、《歴代正史食貨志訳註》と題する事業を継続し、10種の《正史食貨志》本文の訓読と詳しい注釈を蓄積し、〈論叢シリーズ〉として2009年までに《宋史食貨志訳註》(一)～(六)・索引、計7冊(総頁数3,997頁)を公刊してきた。本研究はこれらの永年の蓄積に基礎を置くものである。これまで継続してきた明代日用類書『新刻天下四民便覧三台万用正宗』(以下『三台万用正宗』と略す)の訳注作業を一層深めてデータベースとして公開するとともに、『三台万用正宗』の主要部分を改めて見直し、他の日用類書との比較を行って、明代日用類書全体を通観する視点を探る。これは基層社会における「知」のあり方を考える重要な手がかりとなり、中国独特の〈柔らかな〉基層社会を捉えるための基礎となるはずである。2024年度は、①『三台万用正宗』巻21〈商旅門〉全体の訳註を完了し、訳文の見直し、関連する東北大学狩野文庫蔵『商賈指南』との校合、注釈等の整理を行い、研究データベースとしての公開に向けた読み直しを進めた。同書巻38〈農桑門〉(農業)の訳註のほか、巻9〈音楽門〉の訳註も完了した。なお、巻26〈医学門〉下段は訳註を完了してその修正を行い、続いて上段の訳註を進めた。巻27〈護幼門〉(小児医療と医薬)は三分の二の訳註を完了し、巻39〈僧道門〉は六分の四の訳註を完了した。②光緒2年(1876)刊(道光7年(1827))

頃刊の重刻本)の釈題承集・釈儀潤校『参学知津』、及び民国初『武林進香録』・『武林進香須知』の路程書・巡礼書は二分の一の訳注を完了した。今後は月例研究会で報告を行い、データベース公開に向けた準備作業を進める。③北宋の漕運、官物貿易関連史料の読解と用語の収集・採録を進めた(No.6)。

「中国近世の法と社会の構造解明」グループでは、史料に基づく実証研究の報告及び討論を行っており、2024年度は10月19日に山田賢氏「地域の記憶を記録すること——清末民国初期の地方志編纂と史料」、12月14日に木下慎悟氏「清代中期における裁判実務——档案と地方官の記録から見る訴訟手続の運用」、3月11日に濱島敦俊研究員「土地開発と客商活動——明代中期江南地主の投資活動」合評会(評者 大澤正昭、山田賢、岸本美緒)の計3回研究会を開催した。班員の奥山憲夫氏(2024年ご逝去)の手書き遺稿(明代中期法制に関する研究)について、東洋文庫リポジトリへの掲載に向けた準備を進めた(No.7)。

近代中国研究班では、研究テーマ「20世紀日本の中国調査研究機関に関する総合的研究」に関する研究会を3回開催し、「河南における泡桐栽培について」、「蚕糸業同業組合中央会(1915-1932)の中国調査」、「大同学院「実態調査」の一端——第17期生の日記を手がかりに」、「近代中国の紡績労働者——インドとの比較の前提として」、「神田正雄の中国調査」、「在華宣教師の第一次世界大戦」などの研究報告と、それをめぐる討論を積み重ね、2025年度にシンポジウムを開催する方針を確認した。中国社会科学院近代史研究所金以林副所長等の東洋文庫訪問に対応し、今後の学術交流の可能性について意見を交換した。近現代中国関係書籍の系統的な収集問題について、現代中国研究班や図書部などとも討議を重ね、中長期的な方針を確定した(No.8)。

東北アジア研究班のうち「近世朝鮮研究資料の基盤的データベース構築」グループでは、韓国のソウル大学奎章閣学術院、国立中央図書館、ソウル市立歴史博物館、国立大邱博物館等で朝鮮近世資料の調査を行い、京都大学附属図書館で河合弘民が朝鮮で蒐集した図書に関する調査を行うなどした。東京大学韓国朝鮮文化研究室に寄贈された豊基泰氏関係の記録類(『豊基泰氏族譜』及び関連古文書類)の書誌学的ならびに古文書学的分析を進めた。前期東洋学講座をテーマ「朝鮮近世の史料世界——文献、文書、地図」のもと全3回担当し、研究成果の一般への普及に努めた(No.9)。

「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループでは、満族関係資料の研究の一環として、清朝満洲語文書資料、とくに東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗檔」(鑲紅旗満洲都統衙門檔案)、及び「鑲白旗檔」(鑲白旗蒙古都統衙門檔案)をはじめとする諸資料に関する基礎的な研究を行った。1980年代以降に班員が実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究を継続した。中国における当該研究の中心の一つである中央民族大学歴史文化学院ならびに同大学図書館との共同研究について協議を継続的に行った(No.10)。

「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループでは、これまで取り組んできた東洋文庫所蔵の清代文献史料類のうち、漢文以外の言語文字を用いて

記載されたものを対象に、デジタル化公開に向けた整理分析作業を進めた。満洲文と漢文が混在する東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』全6冊の解読を継続した。2023年度後期東洋学講座「中国王朝の儀礼・祭祀～始皇帝から大清皇帝まで～」において、清朝をめぐる中国祭祀儀礼継承の問題を中国古代からの流れの中で検証したことを契機に、中国古代から中華民国までに至る「貨幣経済を背景とする商人活動と交通網」の流れを広くユーラシアの視点から検証する作業を開始した (No.11)。

日本研究班では、『岩崎文庫貴重書書誌解題 XI』に向け、班員が分担して書誌を採録し原稿を作成したのち、東洋文庫に集まって原本を確認しながら協議と点検を行った。また、浮世草子を専門とする京都府立大学の藤原英城教授を監修者として招き、解題本文の詳細なチェックと研究情報の加筆に多大な協力を得た (No.12)。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班のうち「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループでは、10月に名誉研究員の Peter Zieme 氏を招聘し、突厥碑文研究会の日本側メンバーとともに、トニユクク碑文研究の成果出版に関する諸事項・内容を検討・確定した。トルファン所蔵のウイグル文字・ブラーフミー文字を中心とする古文献の基礎データ研究の復活を目指し、中国の研究者との連絡再開を試みた。本グループの従来 of 研究成果と展望について、11月開催の東洋文庫100周年記念国際シンポジウムにて報告した (No.13)。

「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループでは、近現代中央ユーラシア地域の定期刊行物に掲載された現地語の論説・記事を精読する研究会をオンラインで5回開催した。また、近現代中央ユーラシア定期刊行物に関する新しい研究資料の共有をはかった (No.14)。

三菱財団人文科学研究助成による国際共同研究として、ウズベク人研究者3名とトルコ人研究者2名の参加を得て、「近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究」を進めた。この間、研究成果と情報の共有をはかる一方、12月には上記5名の研究者と研究代表者（小松久男）がタシケントに参集して、2025年4月に東洋文庫で開催予定の国際ワークショップの準備を行った (No.14)。

「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究、国際発信」グループでは、内陸アジア出土古文献研究会の例会を対面・オンライン併用で計8回開催し、班員のみならず、中堅若手研究者も報告を行った。報告内容は敦煌トウルファンに限定せず、広く「内陸アジア」出土の漢語・漢文文献や各種文物に拡げ、中国西北地方の各地で各種文物の発見が相次いでいる状況に即応することにした。日本滞在中の中国人研究者(対面)、在中国の研究者(オンライン)の参加を得ている。また2026年度までに開催予定の小規模なシンポジウムで取り上げるテーマを選択する予定であり、それに向けて、2024年度は歴史学だけでなく、美術史や音韻学関連の報告も行った (No.15)。

土肥研究費による研究活動として、これまで「土肥義和氏手写敦煌吐魯番文書ノート」(「土肥ノート」)の整理と把握に努めてきたが、2024年度に入力作業を終了した。

「土肥ノート」とともに東洋文庫に寄贈されたその他の資料についても「土肥ノート」に関連するものを中心に有効活用の方途を検討した（No.15）。

チベット研究班では、「チベット語資料研究データベースとチベット文化の継承」をテーマに、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料（トゥカン著『一切宗義』、『〈阿闍世王経〉蔵・漢諸本校訂対照テキスト』、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』）の調査研究を行った（No.16）。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、「インド古代～近世における文書資料の研究」をテーマに、2024年10月に対面形式で研究会を実施し、班員による報告を行った（No.17）。

東南アジア研究班では、研究テーマ「近世後期の東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」を推進するため原則月4回の研究会を開催した。研究環境やテーマが多様化するなかで、基礎資料研究の重要性を再確認し、また東洋文庫の抱える資料や研究者の利点を活かし、前近代と近現代を包括的に視野に入れることを目指した。2024年度は、1821～22年にシャムとコーチシナの宮廷を訪問したイギリス人 J. Crawford の旅行記 *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China* (London, 1828) の第1章を輪読し、イギリスの拠点ペナンとクダー王国やシャムとの確執、マラッカ海峡の多数の島々とその海域で暮らすマレー人について検討した。また近世から近代への移行期を検討するため、合わせて J. Th. P. Blumberger, *De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië* (Haarlem, 1931) の“Sarekat Islam” と “Sarekat Islam (Vervolg)” の章を輪読し、オランダ領東インドでの共産党反乱後のイスラム同盟党の動向について考察した。上記の英語文献とオランダ語文献の講読を隔週ごとに進めた。また、前近代の東南アジア社会を検討するための貴重な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏収集の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理が一段落したため、その目録およびジャワ語碑文資料を『東洋文庫書報』第56号で紹介した（山崎美保「仲田拓本とインドネシアの刻文」）。2020年度購入の集豊 (Qiep Hong) 文書（全8箱）について、①帳簿（華語）、②請求書、納品書、受領書、送付状（蘭、華、マレー語）、③取引先との書簡（蘭、華、マレー語）、④社会活動関連（主に華語の中華総商会、華語学校、救国基金に関する文書）、⑤その他（写真など）のカテゴリーのうち、すでにデジタル化した文書に基づき、取引先や親族の分析を進めた。また④の学校や社会団体への寄付文書は、1930年代以降の華人社会の状況を検討するための重要な資料であることが明らかとなった。今後史料分析とともに中部ジャワの現地調査を現地研究者も交え実施する構想を練った。11月開催の東洋文庫100周年記念国際シンポジウムにて、“The Next One Hundred Years: An Age of Uncertainty and Writing Asian History” の題目で発表を行い、今後の東洋文庫における東南アジア研究の重要性を、東西交流における仲介者の役割ならびに自然災害をめぐる人々の自然観を事例に提起した（No.18）。

西アジア研究では、未校訂の東洋文庫所蔵ヴェラム文書（4点、メクネス関係など）のうち、婚姻文書（フェス、1721～61年）の校訂研究を行い、その概要を「東洋文庫所蔵「ヴェラム婚姻文書」を読む」として『東洋見聞録』第40号（2024年7月刊行）に紹介し、ひとりの女性の結婚・夫との死別・再婚等にともなう婚資や遺産相続についての実状と法手続きを示した。また、当該文書を東洋文庫ミュージアムの100周年記念展において公開・展示を行った（No.19）。

資料研究では、中国、台湾、香港、東南アジア華人社会等に所蔵される文献資料の現地調査による探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を促進する目的のもと、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定（2006年締結）に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫（データベース、約8億4968万字）の提供を受け、東洋文庫からは貴重洋書約10,000コマのデジタルデータを提供し、双方とも大きな研究上の利便を得た。協定は3年更新で、2023年度末で期限を迎えたが、新たに3年間の契約更新を行った（No.20）。

研究会や種々の打ち合わせについては、Zoom ミーティングや Webex ミーティング等を活用した、オンライン形式の研究会や、オンラインと対面を併用した研究会の開催が常態となり、研究会等への参加がむしろコロナ禍以前より容易、活発な状況が続いている。2024年度の研究会の開催回数と人数は、次のとおりである。

年月	総回数	総人数	対面		併用			オンラインのみ	
			回数	人数	回数	人数		回数	人数
						対面	オンライン		
2024年4月	20	172	8	50	7	54	45	5	23
5	19	173	6	31	6	47	48	7	47
6	15	155	6	51	4	29	54	5	21
7	20	219	6	32	8	88	73	6	26
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	13	136	3	44	4	33	27	6	32
10	10	112	2	10	6	42	52	2	8
11	16	262	4	78	9	83	89	3	12
12	14	209	4	66	7	81	51	3	11
2025年1月	16	138	7	31	6	50	43	3	14
2月	20	234	7	35	9	112	73	4	14
3月	13	334	10	114	0	96	111	3	13
総計	176	2144	63	542	66	715	666	47	221

2024年度の国際共同研究の対象機関を研究班別に一覧表化すると、下記のとおり。

研究班	2024年度
総合アジア	ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センター（イギリス）、中央研究院近代史研究所（台湾）、フランス国立極東学院（フランス）
現代中国	中央研究院政治学研究所（台湾）、華東師範大学（中国）
前近代中国	中国政法大学古籍研究所（中国）
近代中国	中国社会科学院近代史研究所（中国）

東北アジア	中央民族大学歴史文化学院・同大学図書館（中国）*1
中央アジア	国際テュルク・アカデミー、カザフスタン東洋学研究所（ともにカザフスタン）
チベット	Universiteit Leiden（オランダ）、Universität Wien（オーストリア）*2
東南アジア	ベトナム社会科学院漢喃研究所
東アジア資料	中央研究院歴史語言研究所（台湾）

*1 協定の締結を調整中。

*2 ライデン大学シルク教授の研究チーム（Open Philosophy <https://openphilology.eu>）、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループとの共同研究。

(2) 総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、中村威也

全研究班が参画する総合アジア圏域研究では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって、各研究班との協力のもと、アジア基礎資料研究における研究推進サイクル、すなわち「基礎資料研究活動」、「研究データの保存」、「研究データの発信」、「研究データの継承」の各段階において、これまでに構築してきた既存のプラットフォームを活用しつつ、新規の研究データベース構築を行い、また他機関との連携も進める。

「基礎資料研究活動」は100年間にわたる東洋文庫の伝統的なアジア研究を継承・発展させるものである。今期においては、東洋文庫所蔵資料の目録や解題、関連研究論文等、これまで紙媒体で蓄積されてきた過去の研究成果について、著作権等の問題に留意しつつデジタル化して「東洋文庫リポジトリERNEST」に収録することに力点を置く。同時にこれらの研究成果に適切なメタデータを新たに加えて国際規格に合わせて公開することで、ユーザーからのアクセスをより容易なものにする。また、「100周年記念事業」の一環として、研究活動の推進をバックアップしてきた東洋文庫の創立以来の運営管理に関わる重要な文書についても、日本の東洋学の歩みを記録した貴重な資料であるという観点から、「東洋文庫アーカイブ」としてその保管体制を構築し、デジタル化も推進していく。

基礎資料研究活動の成果は、2023年度に初歩的に整備した「蔵書・保存修復記録・展示記録・研究成果の連携データベース」にも収録する。このデータベースにより、NACSIS対応の蔵書目録としてデータ移行が進行中である「Toyo Bunko OPAC」（<https://opac.tbopac.com/>）、およびデータの整備が進みつつある「過去の展示記録」、紙媒体で蓄積されている「資料劣化調査・対策票」の各データと結びつける形で「研究データの保存」をはかると同時に、将来における蔵書の保存修復や展示活動等、蔵書の利活用においても研究データを積極的に役立てていく構想である。さらにすでに導入済みの精密顕微鏡の利用によって得られた蔵書の紙質画像データもこれに組み込み、蔵書の保存・修復に活用することを目指す。

「研究データの発信」面においては、研究班等により蓄積・作成されたデータについて

て独自の実験性を持ったデータベースを構築すると同時に、画像共有のための国際規格IIIF (International Image Interoperability Framework) やテキストデータの共有・継承のための国際的なガイドラインTEI (Text Encoding Initiative) に基づく形で公開する作業を継続する。また公開データには適切なライセンス付与を行い、ユーザーによる独自の関心に基づくデータ利用や、データを利用した研究の進展を促す。さらに、地理的・時間的なメタデータ付与、絞り込み検索機能の充実、リンクトデータ (Linked Data) 等、データベース間でのデータ共有技術の応用等により、データの発見性を高めることを目指す。上に述べた東洋文庫における「研究データの発信」を図式化すると、次のようになる。



最後に、「研究データの継承」では、デジタルデータの記録媒体の劣化や故障のリスクを最小限にするため、既存のデータも含めた記録媒体の点検・管理、およびクラウドサーバを活用した保管や定期的なマイグレーション(記録媒体の転換)体制を構築する。同時に、複数の場所における保管に向けた計画を進める。さらに、東洋文庫における研究データサイクルの流れを不断に検証するため、定期的に東洋文庫内外の研究者、とくに文系・理系を問わず若手研究者を集めて「研究データベース会議」を開催する(No. 1)。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、研究データベース共同研究グループが中心となり、各研究班と共同のもと、下記の研究活動に取り組んだ。

2022年度に構築した画像公開共有のための国際規格であるIIIF (International Image Interoperability Framework) により画像を公開するためのリポジトリ「Toyo Bunko Media Repository」(以下「TBMR」と略す)への画像追加を継続した。本リポジトリは、今後東洋文庫における画像公開の標準フォーマットとして機能するもの

であり、書誌データベースであるToyo Bunko OPAC、論文等の研究成果のデータベースである東洋文庫リポジトリERNESTと連携させながら、積極的に活用していく。2024年度は、主に下記の各データベースと連動させる形で必要な画像を追加した。

「近代中国関係日本語資料」については、資料の追加を継続し、19タイトル、3,137画像を追加した。また創立時の展示目録『東洋文庫展観書目 甲・乙』所収の和漢書44タイトル14,189画像を新たに公開した。

Toyo Bunko Media Repository アイテム (資料) 閲覧・検索 階層検索 アイテムセット (コレクション) を見る このページについて

『東洋文庫展観書目』掲載書籍

タイトル	『東洋文庫展観書目』掲載書籍
内容記述 / Description	東洋文庫創立時に行われた蔵書展示会 (1924年 [大正13年] 11月29日・30日) の目録である『東洋文庫展観書目 甲』、『東洋文庫展観書目 乙』に掲載された書籍です。 『東洋文庫展観書目 甲』 『東洋文庫展観書目 乙』
資源識別子 / Identifier	1924mokuroku
識別子	0010_0001

閉

1-30 of 44 results / 2

登録日 ▼ 昇順 ▼



毛詩 零本 (唐蟋蟀詠訓傳第十、蟋蟀在堂歲聿其暮、至悠々蒼天曷其有常)



禮記正義單疏 卷第五殘卷 (曲禮上第一、逮事父母諱王父母、至曲禮下第二、去國三世)



文選集注殘五卷 存卷第四十八第五十九第六十八第八十七第一百十三



八家秘録 (諸阿闍梨真言密教部類總録)



帳中香



經筵進講 其他種々



廣群芳譜



國史草木昆蟲攷



動植物名彙稿本



論語二跋本 魏何晏集解



論語單跋本 魏何晏集解



論語無跋本 魏何晏集解

Toyo Bunko Media Repositoryの『東洋文庫展観書目』掲載書籍のコレクション

西アジア研究班との協力のもと、モロッコのアラビア語契約文書 (15点) の基本情報 (作成年代、内容 (法的行為)、取引者、対象物件など) の一覧データ、写真画像、

アラビア語校訂テキスト、英文解題、注釈、参考図表（Chart、系図、署名）を関連づけたデータベースを構築する作業を行い、プロトタイプ版を完成した。

クリスチャン・ダニエルズ研究員寄贈の雲南省収集碑文資料162件のデジタル画像をIIIF化して、拓本の由来等に関する解題、碑文の釈文、地名・人名等の注釈を加えた研究データベースについては、モロッコのアラビア語契約文書データベース構築を優先させたため、着手後の進展がなかったが、上記データベース制作の過程で蓄積された技術を応用し、2025年度に公開予定である。

2021年度公開の「水経注図データベース」について、中国古代地域史グループの研究成果である『水経注疏訳注』のシリーズとデータを連携するため、訳注の索引を元にリンクの基礎となるデータを作成し完成させた。

100周年事業を機に整理された記録の活用に向けた作業の一環として、蔵書の書誌、ミュージアム開館以前も含めた展示記録、保存修復の記録、関連する研究データが連携した「展示保存修復研究連携データベース」のプロトタイプ版（2023年度構築）につき改良を加えた。また東洋文庫リポジトリにおいても過去の東洋文庫の歩みを記録した資料の公開を進め、「東洋文庫の歴史」のカテゴリーのもとで過去の展示目録等を公開した（https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1701071161522）。

文理融合型アジア資料学の主要課題として、東洋文庫所蔵資料の紙質のデータ計385件を取得したほか、過去に取得した4,585件のデータを整理し、データベースに取り込む準備を進めた。機械認識に関しては、研究協力者の中村覚氏（東京大学史料編纂所助教）により、竹紙によくみられる竹の導管細胞のアノテーション環境を作成し、竹紙の機械認識が実現できるよう作業を継続した。さらに東京文化財研究所および実践女子大学文芸資料研究所の紙質調査グループと緊密な交流を行い、非破壊分析方法の改良を模索した。

研究協力者の中村覚氏をシドニーに派遣して、11月21日にState Library of New South Walesで開催の国際シンポジウム“George Ernest Morrison symposiumにて参加・報告（“Enhancement of the Morrison Pamphlet Database by the Toyo Bunko”）を行い、State Library of NSWにおけるモリソンコレクションのデータベース構築の内容に関する知見を得た。

2024年12月、順天堂大学の渡部幹夫氏と東洋文庫所蔵レメリン『小宇宙鑑』のデジタル撮影に向けた研究打ち合わせを行った。2025年3月、学習院女子大学・日本学術振興会特別研究員PDの阿久根晋氏と東洋文庫所蔵キリスト教文献のデジタル化・データベース化に向けた研究打ち合わせを行った。

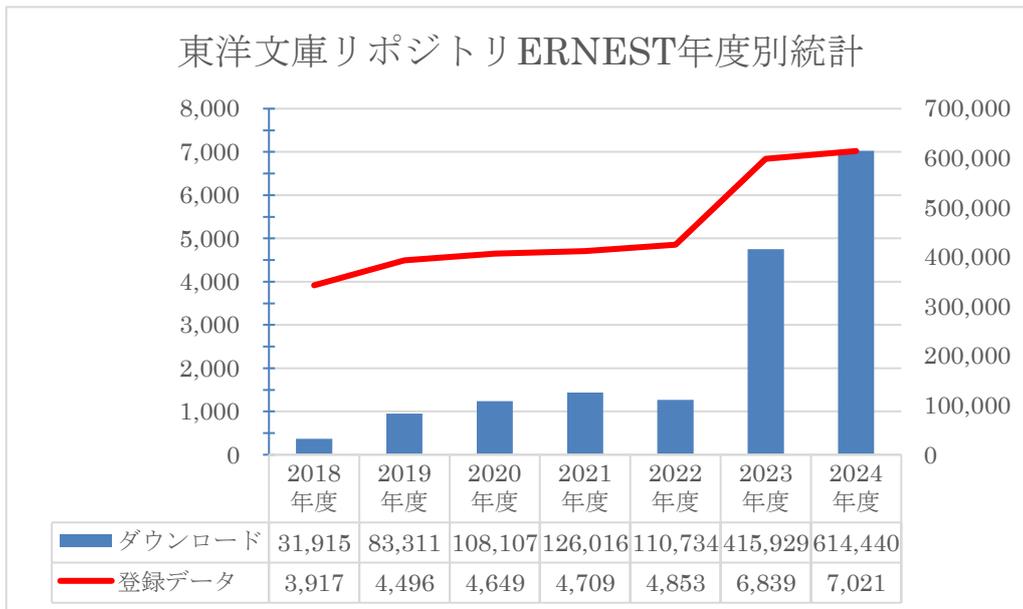
東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」を新システム「JAIRO Cloud」に移行して以降、データの充実に努めてきた。その結果、登録データ件数は7,021件に達し（2025年3月現在）、2024年4月～2025年3月のダウンロード件数は614,440件を記録した。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存管理するための受け皿としても活用していく（No. 1）。

2024 年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>



年月	検索	閲覧	ダウンロード
2024 年 4 月	503	29,573	56,604
5 月	716	32,595	54,936
6 月	1,042	38,811	49,731
7 月	795	32,180	44,279
8 月	739	35,844	47,378
9 月	492	52,660	56,006
10 月	710	39,433	39,020
11 月	1,013	37,232	45,268
12 月	1,295	28,953	47,479
2025 年 1 月	970	35,200	44,876
2 月	4,944	31,210	67,608
3 月	21,755	30,512	59,376
総 計	48,114	422,556	614,440



※2023 年 8 月より新システムによるリポジトリの公開開始。統計方法も変更された。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、東洋文庫ならではのコレクションである「日本人中国旅行記」の解題を刷新し、リポジトリ公開した（村田雄二郎ほか『新編明治以降日本人の中国旅行記（解題）』、2025年3月）。この成果を基盤にして、2025～2026年度に同コレクション約400点のテキスト化・画像化を実施し、テキストマイニングの手法を用いるなどして新たな研究成果を国内外に発信する計画を立てた。資料グループでは、機械学習によるデジタル翻刻を活用して、オーストラリアのニューサウスウェールズ州立図書館（通称ミッチェル図書館）所蔵のG. E. モリソンの日記の翻刻作業を試行的に継続した（No. 2）。唐奨研究費では、モリソンパンフレットデータベースの構築・改良に取り組んだ。2025年度中に、要旨と画像データを統合し、OCR

機能を実装し、国内外の研究者が利用可能な「モリソンパンフレットデータベース」を完成する予定 (No.2)。

現代イスラーム研究では、「日本における中東・イスラーム研究文献DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,200の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」(<https://search.tbias.jp/>)に掲載し、DB文献総件数は64,600件(2025年3月末時点)となった(西アジア研究班との共同事業)。また、「中東近代史資料データベース」(仮)の作成を構想し、各グループの基本的な合意を得た。2025年度にイラングループを中心に具体的なデータベース作成の試案を作成し、検討を経たうえで2026年頃から具体的なデータベース作成に入る。イラングループでは、3月10日開催のワークショップ「Curating Women, Life, Freedom」で講師をつとめたPedram Khosronejad教授(Western Sydney University, Australia)より、イラン国内のドキュメンタリー映画のコレクション数百点を東洋文庫に寄贈するとの提案があり、広く中東・中央アジア地域における映像資料・音声資料の保存・蓄積およびデータベース化のための環境を整備する構想を立てた(No.3)。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループが2021年度に公開した中国古代地域史研究の基礎資料ともいべき『水経注』の研究にとって極めて有用な『水経注図』(楊守敬・熊會貞撰、光緒31年(1905)宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊)のデータベース(<https://static.toyobunko-lab.jp/suikeichuzu/>)に、東洋文庫リポジトリで公開中の既刊『水経注疏訳注』の地理関係データを接続させる試みを開始した。また秦漢律令データベース構築のための基礎的作業を進めた(No.4)。

「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、原三国時代～三国時代遺跡の墳墓データベースのうち楽浪郡の墳墓データベースの追加作業を行い、東洋文庫所蔵の梅原考古資料と調査古墳とを対比してデータベースを補完した(No.5)。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、『中国社会経済史用語解』〈法制篇〉の約12,000語にわたる用語解説データのエクセル入力、及び第一レイヤ～第三レイヤの項目分類を完了し、研究データベースの公開に向け、分類・解説文の補訂等の追加作業を継続し、3,000～4,000項目の法制用語を抽出して内容・形式を整えた。『三台万用正宗』巻21〈商旅門〉及び東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究データベースの公開に向けた補訂作業を継続した(No.6)。

近代中国研究班では、近代中国関係日本語文献目録のデジタル化と公開を進めたうえで、今後、横田、波多野による新聞切り抜き集や汪政権駐日大使館檔案などのデジタル化と公開についても検討を始めることを確認した(No.8)。

東北アジア研究班のうち「近世朝鮮研究資料の基盤的データベース構築」グループでは、解題目録として既刊の戸籍関係資料と成冊帳簿類のデータベース構築を進める準備を行った(No.9)。「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グ

ループでは、クリスチャン・ダニエルズ研究員収集の「雲南石碑拓本」の整理作業とデータベース化に取り組んだ（No. 11）。

日本研究班では、公刊した『岩崎文庫貴重書書誌解題XI』掲載の貴重書80点に含まれる西鶴の著作について、TBMRで画像公開する準備を行った（No. 12）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループがIOM所蔵のウイグル文字を中心とするテュルク語古文献のマイクロフィルム（東洋文庫所蔵）について、原典の書誌データの統合を継続した。図書部との連携のもと現代ウイグル語出版物の整理・カタログ化、データベース化の準備を行った（No. 13）。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信」グループでは、**土肥研究費**による活動として、引き続き「土肥義和氏手写敦煌吐魯番文書ノート」（「土肥ノート」）の整理と把握に努め、2024年度に入力作業を終了し、2025年度に画像データベースとして公開することを目標に校正作業を進めた（No. 15）。

チベット研究班では、河口慧海請来写本大蔵経の『般若部』二万五千頌般若経典4巻（35～38巻）、十万頌般若経典3巻（17～19巻）、一万八千頌・一万頌等般若経5巻（41巻～43ab、44巻）の画像に基づく研究データベースの作成を継続し、十万頌般若経典3巻（20～22巻）、諸経部3巻（72、75、105巻）の撮影準備を行った。また、河口慧海請来チベット語蔵外文献写本を解読し、チベット語活字体テキストとして電子テキストを作成する作業を継続した。2024年度は蔵外番号41、44（同一テキスト異本）の『ロケンチェン伝』のリポジトリERNEST公開用のデータ作成を完了した。なお、河口慧海請来写本大蔵経『宝積部』『華嚴部』の画像データベースを、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループ（チベット大蔵経プロジェクト）のサイトとリンクさせ、Toyo Bunko Kanjurの名前で公開し、Image viewerで画像閲覧できるようにしている（<http://www.rkts.org> <http://www.rkts.org/images.php?id=1%7CT%7CMW2KG230012%7Cx%7Cx%7Cx>）。また東洋文庫での公開サイトのURLは、The Buddhist Digital Archives (the Buddhist Digital Resource Center)のサイトにリンクされている（<https://library.bdr.io/show/bdr:MW2KG230012>）（No. 16）。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、班員が個別に進めてきた資料のデータベース化の作業とは別に、近年進展の見られる考古学分野、特にインダス文明研究資料のデータベース化に着手し、小茄子川歩氏（京都大学）に協力を仰ぐこととなった（No. 17）。**東南アジア研究班**では、J. Crawford, *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China*, (London, 1828)の第1章pp.1-52の概要と、*De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië*, (Haarlem, 1931)の”Sarekat Islam”のpp.79-89と”Sarekat Islam (Vervolg)”のpp.311-333の概要を、ページ、トピック、概要、関連情報の諸点からまとめた(Excelにて前者94件、後者75件)（No. 18）。

西アジア研究では、東洋文庫が所蔵するモロッコのアラビア語契約文書（15点）の校訂および研究を出版しているが（TBRL15, 22）、15点の文書（計149証書、要約を含め計290証書）の基本情報（作成年代、内容（法的行為）、取引者、対象物件、カー

ディー、公証人)の一覧データを作成し、ここから、写真画像、アラビア語校訂テキスト、英文解題、注釈、参考図表(Chart、系図、署名)に関連づけ、検索や閲覧ができる多元的重層的な総合データベースを構築する作業を行った。その試験公開版が作成できたので、これを2025年度5月からウェブ上で公開する。その利用状況を踏まえ、2025年度中に必要な修正作業を行い、本公開を行う予定である。本データベースは、画像共有のための国際規格であるIIIF(International Image Interoperability Framework)、および電子テキストの作成・公開のための国際的ガイドラインであるTEI(Text Encoding Initiative)の技術を活用して作成しており、かつ説明や基本事項を英文で表記している。これにより、モロッコはもとより、より広くチュニジア、エジプトやシリア、オスマン帝国、イランおよび中央アジアの法廷文書の研究者が、当該資料のデータを検索・閲覧等の利用ができるようになり、国内外でのイスラーム法廷文書の研究に寄与することが期待できる(No. 19)。

資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、およびデータベース化とその公開を実施した。東洋文庫所蔵「梅原考古写真資料・日本の部・古墳」について、データベースの構築と公開を目的に、近畿地方の資料838件を入力した。動画資料の公開にも注力し、中国祭祀演劇関係の「郷民儀禮：潮人孟蘭盆祭祀巡遊」、「司祭儀礼：功德儀礼」、「儺戯：柳州儺戯」、「廣東戯(粵劇)：獅吼記」、「潮洲戯：張春郎削髮」、「南方系地方戯：曲判記(閩劇)」、江蘇浙江木偶戯資料の「十子図・全家福」、「蒼南単档木偶戯」、「舟山単档木偶戯」、「上海市崇明島扁担戯」、日本の秋田県黒川能の「式三番(上座)」「絵馬(上座)」「東北(下座)」「大江山(下座)」「春日神社両座合同行事」、新潟県村上市大須戸能の「式三番」「猩々」「蟹山伏」「紅葉狩」「鶴亀」「敦盛」「瓜盗人」「熊坂」を公開した(No. 20)。

(3) 資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、太田啓子、中村威也、本間美紀
上記(1)(2)の諸活動の結果得られた専門知識・最新の研究成果について、国際シンポジウム・ワークショップ・講演会の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリERNEST(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>)での電子的公開、研究データベースの公開等の方法によって、研究データを国際的に発信し、世界のアジア研究の進展に大きく貢献してきた。このうち国際シンポジウム等の報告内容を論文化して出版し、それをPDF形式にてERNEST上で公開する、という一連の流れが形成されつつある。そこで、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。

具体的には、国際シンポジウム・ワークショップの開催を通して、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進し、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実を目指す。国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成する。

出版物の刊行では、国内外の大学図書館等にこれを寄贈することで、学生をはじめ若手研究者の参照・利用に供するとともに、アジア諸国との資料交換・学術交流に活用する。紙媒体での刊行にはこのような教育上の意義や国際交流上の意義があり、当面の間、継続していくが、同時に、東洋文庫リポジトリERNESTを活用して、電子媒体による研究成果の発信をより強化する。なかでも、東洋文庫の諸活動に関する年次報告書『東洋文庫年報』については、速報性が求められる性格の資料であるため、2022年度に電子媒体での発信に完全移行した (https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1078)。2024-2026年度はリポジトリとデータベースを連携させた形式での情報発信への移行を進める。なお、刊行物の詳細は、「Ⅲ 資料研究成果発信」(p.41を参照)で述べる。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州立図書館創設100周年を記念して、11月21日(木)に開催されたG. E. モリソン研究会議に班員1名と研究協力者1名が参加し、成果報告を行った。また、紙質調査研究に関して、徐小潔研究員が6月に韓江大学(マレーシア)、8月に中央研究院(台湾)、11月に東洋文庫の100周年記念国際シンポジウムにて、東洋文庫の紙質調査研究に関する報告・講演を行い、書物の物質研究の角度からの文理融合型人文学研究の可能性について、多くの参加者と議論・交流した(No. 1)。

現代中国研究のうち政治・外交グループでは、Mireya Solis氏(米国ブルックリン研究所)を招いてのセミナー「経済相互依存と国際安全保障：日本の戦略に関する考察」(6月)、中国の冷戦史研究者を招いてのワークショップ「中国の外交と国際関係1980年代」(7月)、台湾中央研究院の研究者を招いてのワークショップ「China's Decade under Xi」(2月)を開催し、議論を交わした。国際関係・文化グループでは、東洋文庫ならではのコレクションである「日本人中国旅行記」を活用した日中関係史に関する新たな研究成果を公刊し、リポジトリ公開した(中村元哉ほか編『戦後日本と中華圏の人物交流史』、2024年9月)。この最新の成果を国外の研究者と共有すべく、11月に「東洋文庫コレクション「日本人中国旅行記」と新たな日中関係史研究の開拓」と題する国際シンポジウムを開催した。また、同コレクションの解題を刷新し、リポジトリ公開した(村田雄二郎ほか『新編 明治以降日本人の中国旅行記(解題)』、2025年3月)(No. 2)。

現代イスラーム研究では、3月10日(月)にPedram Khosronejad教授(ウェスタン・シドニー大学)を招いてワークショップ「Curating Women, Life, Freedom」を開催した。同教授からはイラン国内のドキュメンタリー映画数百点からなるコレクション寄贈の提案があり、中東・中央アジア地域の映像資料・音声資料の保存・蓄積と今後の活用について検討を開始した。2026年度中のTBRL刊行を目指して執筆者の人選を進めた(英語論稿8本程度を収録予定)。また2026年度開催予定の西アジア研究班・中央アジア研究班等との国際シンポジウムについて検討を行った(No. 3)。

東アジア研究のうち**前近代中国研究班**では、「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時

代の簡牘検討」グループが『水経注疏』巻10漳水篇の研究を完了し、5冊目となる訳註本を3月に刊行した(2025年度初頭リポジトリ公開予定)(No. 4)。「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループでは国立加耶文化財研究所、国立慶州文化財研究所、東亜細亜文化財研究院等と意見交換、共同研究を進め、2025年度にこれらの機関との共催で国際シンポジウム等の開催を計画した(No. 5)。「中国社会経済・基層社会用語シソーラス(thesaurus)の構築」グループの研究成果を集約した『増補改訂 中国社会経済史用語解』(唐奨研究費)の公刊は翌年度に延期となったが、体裁・構成は確定し、「公文書」篇の重要語181項目の参考文献を補うなど、順次編集作業を進めた(No. 6)。「中国近世の法と社会の構造解明」グループは班員が中心となって4月6日・7日に「中国近世の法制と社会」国際学術シンポジウムを開催し(東洋文庫・中国政法大学古籍研究所共催)、中国・台湾・日本から計13名による報告と質疑が行われた(No. 7)。

東北アジア研究班では、「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループの成果として『清朝の史跡をめぐってⅢ 中国東北篇Ⅰ』の出版およびリポジトリ公開を行った(No. 10)。「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループは東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』全6冊、満洲文・漢文の混在資料)の解読・検証の成果として、2025年度に予定している第2冊所収「太廟・奉先殿・社稷壇」の出版準備を進めた(No. 11)。

日本研究班は、『岩崎文庫和漢書目録』に「浮世草子」として掲載される貴重書144点の内、アイウエオ順にして前半の78点の書誌解題を収録した『岩崎文庫貴重書書誌解題XI』を公刊した(2025年度初頭リポジトリ公開予定)(No. 12)。

内陸アジア研究のうち、中央アジア研究班「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループは、8月と1月を除く毎月、「突厥碑文研究会：トニユクク碑文研究」を、日本、ドイツ、トルコ、ときにモンゴルを結びながらオンライン開催し、成果の公刊に向けた編集計画を立案した(No. 13)。「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループは、2025年4月に東洋文庫で開催予定の国際ワークショップ「近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究」(三菱財団研究助成)について、ウズベク語・トルコ語による研究論文集の作成・刊行に向けた協議を行った(No. 14)。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信」グループでは、2023年度に東洋文庫で開催した国際シンポジウム「敦煌・吐魯番研究の最前線——その伝統と革新」の講演・報告に、班員の論文を加えた論文集『敦煌・吐魯番研究の最前線』の刊行に向け、執筆・編集作業に着手した(2026年度刊行予定)。そのほか、中国で開催された国際会議「第二屆文明交流互鑒學術研討會：世界与浙江」、「中国古代民族文化交流与融合的新視野——紀念黃烈先生誕辰100周年國際學術研討會」(いずれも9月)に班員が参加、あるいはペーパー提出を行った(No. 15)。

チベット研究班では、基礎資料研究の成果として、トウカン著『一切宗義』中国の章(担当：吉水千鶴子、池尻陽子)、『〈阿闍世王経〉蔵・漢諸本校訂対照テキスト』(担当：宮崎展昌)の刊行準備を進めつつ、2025年11月開催予定の国際シンポジウムの準備を進めた(No. 16)。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、前年度までの研究成果の国際的な発信と

して、英文論集 *Aspects of the Literary Sources in South Asian Historical Studies* (TBRL 25)を刊行した(No. 17)。

西アジア研究では、2023 年度開催の国際シンポジウム *Contracts, Litigation and their Norms Compared* に基づく英文論集を 2025 年度に TBRL の 1 冊として刊行するための編集作業を進めた(No. 19)。

(4) 若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎

東洋文庫では、若手研究者の育成を通して、100年間にわたって積み重ねてきた東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者を裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く市民に還元することを目指している。そこで、下記の取り組みによって、若手研究者が自発的な研究活動を行えるよう支援する。

1. 日本学術振興会特別研究員 PD の受入

日本学術振興会が募集する特別研究員 PD は、博士の学位取得後5年未満の若手研究者が、出身大学とは異なる、新たな環境に身を置いて、自由な発想のもと、主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保を図る制度である。東洋文庫では、特別研究員 PD を積極的に受け入れ、経験豊富な専任の研究員の指導のもと研究活動に取り組めるよう支援する。

2. 東洋文庫奨励研究員の任用

日本学術振興会特別研究員 PD が博士の学位取得後5年未満の若手研究者を対象とするのに対し、東洋文庫の研究活動に参画している若手研究者の中から、博士の学位取得後10年未満の者を選抜して東洋文庫奨励研究員に任用している。奨励研究員には科学研究費や斯波研究奨励金・榎原研究奨励金（ともに年額50万円）への応募資格を与え、東洋文庫の書庫・研究室の自由な利用を認めている。東洋文庫研究班の研究活動への参加を通して実践的な研究指導を受けることで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進に取り組む。

従来の「奨励研究員制度」では、日本学術振興会特別研究員 PD として、東洋文庫で受け入れた若手研究者が、最終年度に科学研究費を申請して採択された場合に、奨励研究員に移行することになっていた。しかしながら、不採択となった場合は PD の任期終了とともに東洋文庫との繋がりが途切れることになり、次のキャリアが見つからない場合も少なくない。そこで、2024年9月に「奨励研究員制度」を改定し、PD の任期終了後、1年間の限定で奨励研究員として受け入れることとした。翌年度に科学研究費が採択されれば、科学研究費の採択期間中、奨励研究員の任期を延長する。

3. 東洋文庫嘱託研究員の雇用

日本学術振興会特別研究員 PD、東洋文庫奨励研究員をはじめ若手研究者のポストとして東洋文庫嘱託研究員の雇用を行っている。嘱託研究員は、その専門性を生かして

東洋文庫の諸事業に参画しつつ、科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫の書庫・研究室の自由な利用を認めている。また、東洋文庫研究班の研究活動への参加をはじめ、研究者としてのキャリアアップに必要な諸活動を行うことができる。任期満了後は、専任の研究者として東洋文庫を拠点に研究活動を行うことができる環境を提供している。

4. 東洋文庫の諸事業への参画を通じた実務経験の蓄積

東洋文庫研究班が取り組む国際共同研究や国際シンポジウム等の運営、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』等の学術誌の編集、資料の収集・整理、および研究データベースの構築など様々な場面において、若手研究者を研究支援者として雇用することで、研究者としての実務経験を積む機会を提供する。これらの経験は、自身の研究活動の幅を広げるだけでなく、国内外の研究者との人脈形成に役立ち、研究者としてのステップアップにつながる。

5. 研究発表を行う機会の提供

日本学術振興会特別研究員 PD、東洋文庫奨励研究員、嘱託研究員をはじめとする若手研究者が、研究成果を発表する機会として、「東洋文庫談話会」を開催する。東洋文庫内外の研究者との質疑応答を通して、研究者として成長する場とする。

6. アジア研究入門講座の創設

東洋文庫に在籍する名誉教授クラスのベテラン研究者や、現役の教授クラスの中堅研究者を講師に迎え、若手研究者向けの「アジア研究入門公開講座」を新たに開催し、若手研究者の実力養成に取り組む。

7. 国際的な研究活動に対する支援

外国人講師を招いて若手研究者を対象に英語論文の作成指導を行い、研究成果の国際発信を支援する。

学術交流協定を結ぶハーバード・エンチン研究所の各種研修プログラムを活用して、若手研究者による国際的な研究活動を支援する。

2022年度に第12代理事長榎原稔氏(1930-2020)のご遺族からの寄付金を原資に榎原研究奨励金を設立し、ハーバード・エンチン研究所など学術交流協定を締結する海外研究機関において、調査・研究・学術交流等の目的で海外渡航を希望する若手研究者に対して支援を行う。

〔研究実施概要〕

若手研究者の育成と雇用支援を、研究データベースの構築と並ぶ最重要課題に位置づけ、以下の計画を重点的に展開した。

6月12日に、若手研究者育成事業オンライン説明会を開催した。若手研究者を対象としたハーバード・エンチン研究所(HYI)のVisiting Scholars Program 応募の説明のほか、研究班活動の紹介(2グループ)、東洋文庫の研究資源等の解説(科研費応募、データベース、蔵書・閲覧室の利用について)を内容としたもので、28名が参加した。

現代中国研究では国際関係・文化グループが華東師範大学歴史学部と中国現代史に

関する学術交流会（6月）を開催し、日中の若手研究者の交流を促したほか、研究協力者である日本学術振興会 PD 比護遥氏の単著をめぐる書評会を実施した（8月）。同じく研究協力者の東洋文庫奨励研究員島田大輔氏もグループの活動に参加しつつ、単著『中国専門記者の日中関係史』（法政大学出版局、2025年2月）を刊行した。比護氏が2025年4月から金沢大学で専任職に就くなど、若手研究者は着実に育成されている（No. 2）。

現代イスラーム研究では、イラングループの若手研究協力者が米国テキサス大学にて在外研究中であるが、継続的に同グループのイラン憲法翻訳作業に携わっている。また、チュニジア憲法の翻訳作業にも複数の若手研究者が従事している。合同研究集会では、参加した若手研究者に HYI の各種プログラムを紹介した（No. 3）。

東アジア研究のうち前近代中国研究班「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループでは多数の若手研究者が研究会に参加しており、彼らの協力が研究会の定期的な開催と成果刊行の大きな力となっている（No. 4）。「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループの韓国現地調査およびデータベース作成作業は常に大学院生とともに、大学院生自身の研究にも寄与している（No. 5）。

「中国社会経済・基層社会用語シソーラス(thesaurus)の構築」グループの研究推進の主力をなしているのは「訳注」、すなわち、史料の正確な和文への翻訳および詳しい註釈を語彙、術語に施すことであるが、永年にわたりグループが培ってきたそのスキルは、扱う時代、主題は異なっても、新進気鋭の若手研究者にとって、資料の操作、読解の力量を増進するために有益である。グループでは訳注を主とする月例研究会を営むが、その班員の半数は老練な専門研究者であり、約半数は修士課程・博士課程の大学院生、または PD ないし現任の大学教員であって、研究成果の報告に基づき、一種の〈上級セミナー〉の形をとっている。若手研究者の担当した報告は下記の通り。

白山友里恵（上智大学大学院修士課程修了）は2021年7月より研究会に参加して『三台万用正宗』巻27「護幼門」下層の訳注を開始し、現在まで計19回の報告を行った。毎回、老練な専門研究者の指摘を受け議論し、大学院博士課程レベルの力量を身につけている。また中国・日本の医学書読解のスキルを有するため、中国前近代の小児医療・医薬を内容とする「護幼門」の訳注を担当することとなった。2024年度に新たに加わった松浦晶子（科学技術振興機構専門員）は自身の研究テーマである中国前近代音楽史の知見を活かして『三台万用正宗』巻9「音楽門」の訳注を行った。今泉牧子（東京都市大学塩尻高等学校非常勤講師）は宋代の地方行政をテーマに「『夷堅志』から見える宋代県令と地域社会—県令が抱えるストレスの一端について—」と題する研究報告を行った（No. 6）。

「中国近世の法と社会の構造解明」グループでは、年3～4回、史料に基づく実証研究の報告及び討論を行っているが、若手育成の活動を積極的に進めることをグループの課題としており、当年度第2回報告者の木下慎悟氏（同志社大学法学部助教）をはじめとして、若手の研究者に参加してもらうように努めた（No. 7）。

近代中国研究班では、東洋文庫奨励研究員に採用された若手研究者に研究会への参加

を求めるとともに、当年度に東洋文庫を訪れた中国社会科学院近代史研究所金以林副所長との意見交換の際も、若手の成長を促す方策を議論した(No. 8)。

東北アジア研究班では、若手研究者育成のため、満洲語文献購読セミナーおよび満洲語研究講座の開催を準備した(No. 10・11)。一方、「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループは、班の新たな研究課題である中国古代から近代に至るまでの「貨幣経済を背景とする商人活動と交通網」にふさわしい若手研究者として、莊卓燐氏(学習院大学東洋文化研究所助教)に参加を要請した(2025年度より参加予定)(No. 11)。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループが現代ウイグル語を扱える若手研究者育成プログラムの策定に着手した(No. 13)。「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループは東京外国語大学と東京大学の大学院生(修士課程)が加わり、計3名の若手研究者が参画した(No. 14)。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信」グループは中堅若手研究者2名を新たに班員に採用し、2025年度よりスタートする新体制を整えた(No. 15)。チベット研究班では、基礎資料研究における共同研究、研究データベース作成における画像データ調査において若手研究者の協力を得た(No. 16)。

インド・東南アジア研究のうち、インド研究班では、インダス文明研究資料のデータベース化について若手研究者の小茄子川歩氏(京都大学)の協力を仰ぐこととしたほか、これまでの多くの研究会に参加してきた古井龍介氏(東京大学)が新たに班員として加わった(No. 17)。東南アジア研究班では、班員以外の若手研究者も研究会に参加できる態勢をとっている。また、研究会では若手東南アジア史研究者の手になる出版物を積極的に取り上げ、出席者の関心の喚起に努めた(No. 18)。

2024年度は、若手研究者育成の一環として下記の者を採用した。

〈嘱託研究員〉

・太田 啓子

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため国際シンポジウム等を通じた国際交流事業に従事した。

・中村 威也

研究課題「中国古代地域社会／非漢族研究、中国史料学、コディコロジー」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事するとともに、東北アジア研究班「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループの研究活動に参画した。

・本間 美紀

研究課題「ペルシア絵画史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

〈奨励研究員〉

・中塚 亮

研究課題「中国古典長編小説、古典演劇」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発

展のため図書事業、および研究データベース共同研究に参画した。

・多々良圭介

研究課題「18世紀清代中国における名医の社会的条件—藤井文庫を中心に」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

・魏 郁欣

研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに前近代中国研究班の研究活動に参画した。

・速水 大

研究課題「『敦煌氏族人名集成』の補完」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに中央アジア研究班の研究活動に参画した。

・河野 敦史

研究課題「現代ウイグル語訳『ターリーヒ・ハミーディー』の「序章」に見られる歴史叙述に関する検討—現代ウイグル語資料の活用促進に向けて—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代ウイグル語図書資料の整理とデータベース化作業に参画した。

・島田 大輔

研究課題「天津租界の日本語雑誌『日華公論』に関する基礎的研究—「日華文化提携」の実相—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代中国研究班の研究活動に参画した。

・鈴木 航

研究課題「国民政府期中国におけるメディア空間の拡大」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに近代中国研究班の研究活動に参画した。

なお、これまでの若手研究者育成の実績として、大学等研究機関の研究職に採用された方について挙げておく。

・横手 夢奈

2024年度7月より普及展示部の嘱託職員として、ミュージアムの展示準備・資料解説等の学芸業務に携わった。2025年4月より、東洋文庫普及展示部正職員に就任。

※次頁の表「研究者として自立した者」の「東洋文庫で正職員に採用した者」。

・比護 遥

2021年度より研究協力者として現代中国研究班国際関係・文化グループの研究活動に参画してきた。2025年4月に金沢大学国際基幹教育院外国語教育系講師に就任。

※次頁の表「研究者として自立した者」の「他の大学等研究機関で研究職に就いた者」。

・大橋 利光

2019年1月より、臨時職員として東洋文庫和文刊行物の編集補助業務に参画してきた。2025年4月より、東洋文庫諸活動の継承・発展のため、嘱託研究員として和文刊行物の編集・校閲に従事する。

※2025年度より下表の「研究者としての自立に向けて支援中の者」として支援する予定。

研究者として自立した者、および研究者としての自立に向けて支援中の者を一覧表化すると、下記のとおり。

研究者として自立した者	2024 年度
東洋文庫で正職員に採用した者*1	1
他の大学等研究機関で研究職に就いた者*2	1
合計(人)	2

*1 1名は嘱託職員からの採用。

*2 1名は研究協力者。

研究者としての自立に向けて支援中の者	2024 年度
嘱託研究員	3
奨励研究員	7
日本学術振興会特別研究員 PD*3	0
うち科研費応募者*4	(1)
科研費採択者*4	(3)
海外協定機関との交流等を支援した者*5	(1)
合計(人)	10

*3 2024年度は応募者なし。2023年度に受け入れた1名は受入研究者の他機関への異動により異動した。

*4 2024年度は1名が応募して不採択となり、他機関からの移管で1名を受け入れた。他2名が継続。

*5 槇原研究奨励金(海外協定機関での調査等のための給付型奨励金)を給付。

II. 資料収集・整理

図書部では、アジア基礎資料研究に取り組む各研究班と協力して、アジアの現状および歴史・文化に関する一次資料（写本、文書史料、刊本、地図、統計、調査記録等）、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の充実に努めた。

収集した資料を速やかに整理して電子情報化することで、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化をさらに推進し、オンライン検索サービスにより広く一般の利用に供するため、様々な言語に通じた司書・研究者・大学院生による書誌データの加工作業を継続した。

2015-2023 年度に続き、東洋文庫の所蔵資料のうち、和書・漢籍・洋書古典・近代初期洋書、絵画、考古資料等に対する悉皆調査を行い、専門家による和漢洋古典籍の保存修復を実施するとともに、書誌学・資料学の専門家の協力のもと調査・分析ならびに記録を行い、デジタル・アーカイブに加工し、広範な利用目的に対応すべく継続的作業を行った。

以上の活動を推進するため、書誌学に通曉した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

A. 資料購入

図書部では、超域アジア研究、アジア諸地域研究（「研究班と基礎資料研究テーマ」（p.14を参照））において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区分	決算額	和漢書	洋書	その他	計
総合アジア圏域研究	5,629,800	18	7	0	25
現代中国研究	792,949	139	0	0	139
現代イスラーム研究	759,875	0	113	0	113
東アジア研究	2,438,989	214	0	0	214
内陸アジア研究	35,570	4	0	0	4
インド・東南アジア研究	270,983	0	6 (1)	0	6 (1)
西アジア研究	391,701	0	96	0	96
共通（継続・大型資料）	12,684,274	957 (829)	152 (128)	0	1,109 (957)
合計	23,004,021	1,332 (829)	374 (129)	0	1,706 (958)

※単位：決算額＝円

和漢書・洋書・その他・計＝冊（その他はマイクロフィルム1リール、CD1枚を1冊に換算）

※（ ）は、上記の冊数のうち雑誌の冊数。なお、洋雑誌のうち共通129冊は欧文雑誌。

主な購入図書

大智度論(天海版 卷第六十四、自卷第八十一至九十三)

安南誥命四種(阮王朝三種、景興元年)

内蒙古自治区档案馆藏清末内蒙古中西部垦务档案

清代循化厅檔案史料選編

東韃沿海図

The Hon. East India Company's steamer "Nemesis" and the boats of The Sulpher, Calliope, Larne and Starling destroying the Chinese war junks in Anson's Bay. January 7, 1841.

(1841年1月7日のアンソン湾において、中国のジャンク船を粉碎する(イギリス)東インド会社所有の(鉄製)汽船「ネメシス号」と5隻のボート)

Versuch den Ursprung der Spielkarten, die Einführung des Leinenpapieres und den Anfang der Holzschneidekunst in Europa zu erforschen. Erster Theil, welcher die Spielkarten und das Leinenpapier enthält. (ブライトコプフ『トランプ・製紙の起源』)

B. 資料交換

図書部では、国内外の各提携機関との間で資料交換を進めた。

区分	受 贈					寄 贈		
	和漢書	洋 書	アジア諸語	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	300 冊	151 冊	85 冊	0 件	536 冊	1,326 冊	419 冊	1,745 冊
定期刊行物	1,197 冊	860 冊	14 冊	0 件	2,071 冊	3,709 冊	629 冊	4,338 冊
計	1,497 冊	1,011 冊	99 冊	0 件	2,607 冊	5,035 冊	1,048 冊	6,083 冊

C. 図書・資料データ入力

図書部では、新収資料の書誌入力および所蔵資料の書誌データ整備作業を継続した。

2020 年度に永青文庫より寄託されたフランスの東洋学者アンリ・コルディエ(Henri Cordier 1849-1925)旧蔵書を主体とする「コルディエ文庫」については、東洋文庫所蔵本との重複調査を一旦完了した。今後、さらに詳細を調査しつつ、近年中に文献解題を含む新たな目録の完成を目指す。



コルディエの蔵書であることを示す「高」の文字を箔押しした背表紙。



アンリ・コルディエ (Henri Cordier, 1849-1925)。75歳の時に自身で作成したブリオグラフィー、*Bibliographie des oeuvres de Henri Cordier* (パリ, 1924)の写真より。

その他、東洋史学者で、モリソン文庫の将来以来、1934年まで東洋文庫主事としてその運営に尽力した石田幹之助(1891-1974)旧宅の蔵書について調査し、図書や書簡類等のアーカイブ資料をはじめ東洋文庫に所蔵すべき資料を選び出し、受入作業と具体的な調査を行った。書簡や写真、日記、稿本などを含む石田資料全体についても、近い将来の公刊をめざして目録化を進めている。

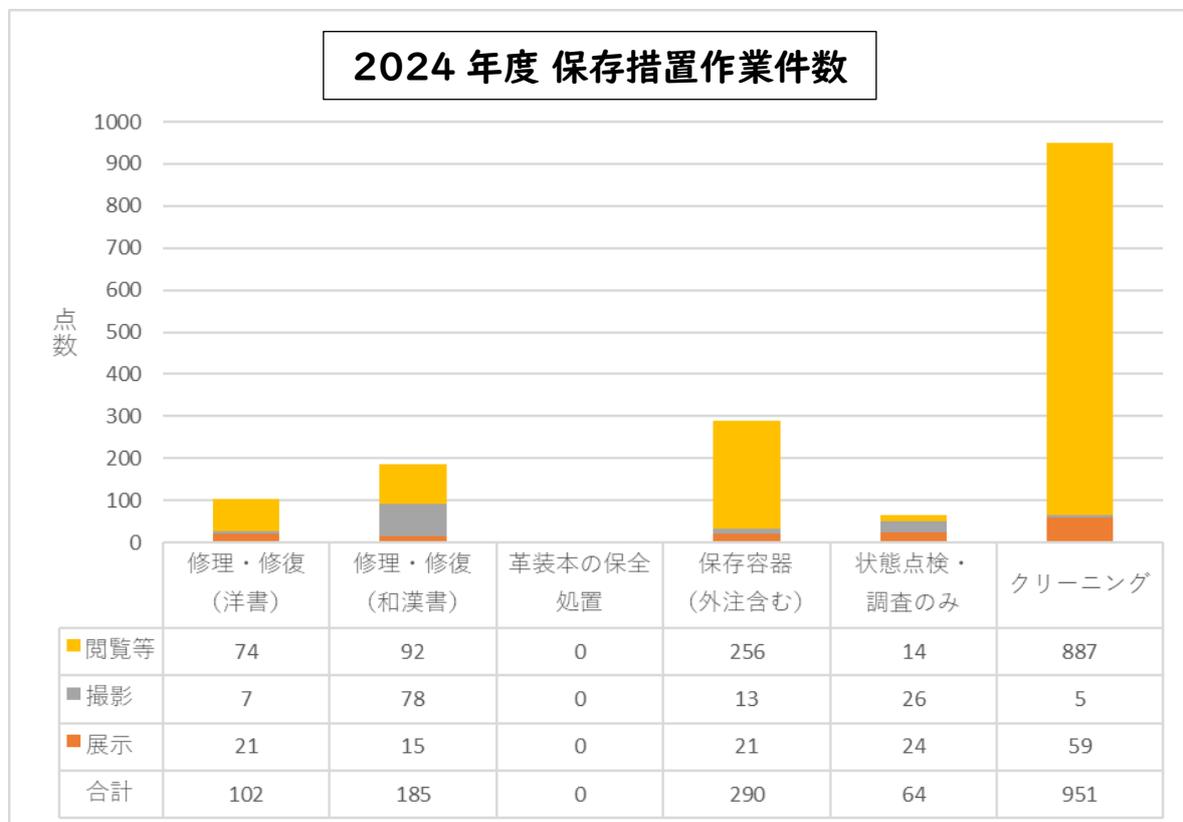
D. 資料保存整理

図書部が2024年4月1日-2025年3月31日の期間に実施した保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫菌害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復、洋書革装本の保全処置、保存容器の作製などを行った。本年度は、昨年度に続き、ミュージアムでの展示資料をはじめとする和・漢・洋古典籍(モリソン文庫・岩崎文庫ほか)を中心に作業を行った。

2022年4月下旬から2024年にかけて全国5箇所で開催した特別展「知の大冒険—東洋文庫、名品の煌めき—」は、石川県立歴史博物館(2024年7月19日~9月1日)で開催され、貸出にともなう展示資料の確認や補修などの保全作業を引き続き行った。

以上に関しては、若手人材育成プロジェクトの一環として、保存修復の専門家による指導のもと実践的な保存整理作業を行った。



Ⅲ. 資料研究成果発信

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)	第106巻第1-4号	A5判 4冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1727740190754		
2. 『東洋文庫欧文紀要』 (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko)	No.82	B5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746081215577		
3. 『近代中国研究彙報』	第47号	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746081441502		
4. 『東洋文庫書報』	第56号	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746081728503		
5. <i>Modern Asian Studies Review</i> ／新たなアジア研究に向けて	Vol.16	オンラインジャーナル(公開済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746081930279		
6. <i>Asian Research Trends New Series</i>	No.19	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746082180800		

B. 論叢等出版

1. 中村元哉・村田雄二郎・山口早苗編 『戦後日本と中華圏の人物交流史』	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1727917627321	
2. 東洋文庫中国古代地域史研究グループ編 『水経注疏訳注(濁漳水篇)』(東洋文庫論叢第86)	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746083943037	
3. 細谷良夫著・加藤直人編 『清朝の史跡をめぐってIII:中国東北篇I』	A4判 1冊(刊行済)
https://doi.org/10.24739/0002000638	
4. 東洋文庫日本研究班編『岩崎文庫貴重書書誌解題 XI』	B5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746083393597	
5. Ishikawa Kan ed. <i>Aspects of the Literary Sources in South Asian Historical Studies</i> (TBRL 25)	B5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1746082584024	

※URLは、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」の掲載アドレス(一部は公開準備中)。

IV. 普及活動

研究部では、アジア基礎資料研究の成果を一般に普及するため、研究員等による東洋学講座を前後 2 期に分けて全 5 回オンライン形式で実施した。また、著名な外国人研究者による特別講演会を開催した。従来の対面での講演会・シンポジウム等の開催に加えて、オンライン形式での開催を実施することで、遠方や海外在住者の参加が容易となり、より広範囲に研究成果を発信・普及することが可能となった。

普及展示部では、学芸員を雇用して、東洋文庫の蔵書資料や研究成果をわかりやすく公開するための博物館活動に取り組んだ。年に3回の企画展開催の他、各種講演会やワークショップ、中学・高校・大学との連携による教育活動を展開している。今年度はデジタル展示「古地図の世界」の拡張も行い、最新の展示技術も効果的に取り入れた。さらに、コロナ禍以降急速に重要度が増した動画コンテンツを制作するなど、幅広い層へアプローチを試みている。

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月 DB 小委員会を開催して、協同して OPAC システム・東洋文庫リポジトリ ERNEST 等の管理・運営を行った。

東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化は、総冊数約 100 万冊の基本的な書誌データ部分の遡及入力を完了した。2021 年 1 月に NACSIS-CAT 準拠の OPAC システム「Toyo Bunko OPAC」をオンプレミス形式からクラウド形式に移行したことを受け、2023 年度より 5 年計画で、現行の書誌データベースの約 28 万件の書誌データを Toyo Bunko OPAC に移行する作業を進めている。この作業は書誌情報の発信力を高め、所蔵資料の国際的な活用範囲を拡大することに繋がり、ひいては、東洋文庫の資料情報センターおよびデジタルライブラリーとしての機能を強化していく上で重要な取り組みと言える。

漢籍については、当面 Toyo Bunko OPAC への移行は行わず、「全国漢籍データベース」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>)との連携に取り組んだ。「全国漢籍データベース」は東洋文庫の冊子体目録をもとに作成されたものであるのに対し、東洋文庫の漢籍データベースは、冊子体目録のデータを修正しつつ、その後の新収資料が加わっているため、両者のデータには差異がある。そこで「全国漢籍データベース」から東洋文庫分データの提供を受け、該データと、東洋文庫の漢籍データベースからダウンロードしたデータとを照合して、書誌情報に異同がある部分を洗い出し、データの修正・統合を行い、その上で、「全国漢籍データベース」のフォーマットに合わせて作成した漢籍データをもとに、東洋文庫独自の新「漢籍データベース」を構築する方針を立てた。分量が多いため、修正・統合作業には時間がかかる見込みで、2026 年度までに漢籍データの統合、リニューアル公開を目指すこととなった。

各部協同して、フランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン研究所、ロンドン大学 SOAS 図書館等協力協定機関およびその他の海外機関との学術交流や研究情報の国際発信を促進した。

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

研究部では、近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、前期・後期の東洋学講座を開催した。すべて対面・オンラインの併用での開催とした。

(前期) テーマ: 「朝鮮近世の史料世界—文献、文書、地図—」

第1回(通算第595回)

日時: 2024年6月19日(水)

講演者: 山内 民博氏(東洋文庫研究員、新潟大学教授)

題目: 「刑獄史料にみる19世紀朝鮮の地方社会—流乞・居士・傀儡—」

第2回(通算第596回)

日時: 2024年6月26日(水)

講演者: 六反田 豊氏(東洋文庫研究員、東京大学教授)

題目: 「19世紀濟州島民の異国への漂流—『濟州啓録』の記録を中心に—」

第3回(通算第597回)

日時: 2024年7月24日(水)

講演者: 吉田 光男氏(東洋文庫研究員、東京大学名誉教授、放送大学名誉教授)

「地図・地誌・戸籍で見る近世ソウルの都市空間—街区、施設、住居、住民—」

(後期) テーマ: 「東洋文庫の東洋学: これまでとこれから」

第1回(通算第598回)

日時: 2024年12月4日(水)

講演者: 高田 時雄氏(東洋文庫図書部長)

題目: 「外国文字による漢語表記の歴史的展開」

第2回(通算第599回)

日時: 2024年12月18日(水)

講演者: 濱下 武志氏(東洋文庫研究部長)

題目: 「モリソンのアジア図書館と東洋文庫の東洋研究: 1917-2024」

2. 公開講座・公開研究会

研究部では、東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて実施した(以下、開催日順で記載)。

2024年4月6日(土)・7日(日)「中国近世の法制と社会」国際学術シンポジウム

共催: 東洋文庫・中国政法大学古籍研究所

《プログラム》

青木敦(青山学院大学)「北宋特別法的収集与分析」

李雪梅(中国政法大学)「「碑証」の生成発展と功能分析:以山東靈岩寺宋金元公文碑為例」
劉馨珺(嘉義大学)「從「引保就試」論宋代考場秩序」
趙晶(中国政法大学、北京大学)「滂喜齋本系統《故唐律疏議》刊行年代再蠡測:兼論唐宋至元代律典篇題的書写方式」
翁育瑄(東海大学)「宋代民間訴訟中的「誣賴」案件」
張雨(中国政法大学)「開元二十四年県令誠勵碑所見敕旨与敕牒:兼論唐宋敕牒形態及性質」
陳佳臻(中国政法大学)「治平永則:元明政務六部化及法律六部分類探析」
金珍(成均館大学)「唐前期先決杖の活用与五刑体系變遷」
于曉雯(台湾師範大学)「唐代判文中的孝感祥瑞」
王信杰(台湾師範大学)「元代贓罪的形成与特色」
程実(中国政法大学、京都大学)「明代後半における熱審の変容に関する一考察:刑部左侍郎沈演の「讞牘」を一例に」
嚴茹蕙(北京理工大学)「唐宋「人日」節俗的變貌:兼論対近世日韓的影響」
陳睿垚(中国政法大学)「日本古代私鑄錢犯罪的処罰及其特殊性:以唐日比較為中心」

2024年6月22日(土)シンポジウム「モンゴル帝国史研究の現在と課題」

主催:内陸アジア史学会、共催:東洋文庫中央ユーラシア研究グループ他

挨拶 柳澤明・内陸アジア史学会会長・早稲田大学文学学術院教授

主旨説明 小松久男・東京大学名誉教授・東洋文庫研究員

《プログラム》

第1部 司会:船田善之・広島大学大学院人間社会科学研究科准教授

第1セッション チンギス・カンの実像

宇野伸浩・広島修道大学国際コミュニティ学部教授

「チンギス・カン研究と初期グローバル化としてのモンゴル帝国」

白石典之・新潟大学人文学部教授

「考古学からみたチンギス・カン」

第2セッション ジョチ・ウルスとチャガタイ・ウルス

長峰博之・小山工業高等専門学校一般科准教授

「ジョチ・ウルス史の研究動向から—史料研究・考古学・貨幣学」

松井太・大阪大学大学院人文学研究科教授

「「周縁」からみたチャガタイ=ウルス—トウルファン発現モンゴル語・ウイグル語資料を中心に」

第2部 司会:松田孝一・大阪国際大学名誉教授

第3セッション フレグ・ウルスから見えるもの

大塚修・東京大学大学院総合文化研究科准教授

「モンゴル帝国時代ペルシア語歴史叙述研究の最前線」

諫早庸一・北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター特任准教授

「フレグ・ウルスの崩壊—「14世紀の危機」の解明に向けて」

第4セッション 元朝から広がる海陸交通路

村岡倫・龍谷大学文学部教授

「最古の世界地図『混一疆理歴代国都之図』から見る内陸アジア」

向正樹・同志社大学グローバル地域文化学部准教授

「混一疆理歴代国都之図から見る海域アジア」

第3部 総合討論

司会:船田善之・松田孝一

2024年11月14日(木) フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題:Prussian Blue in East Asian Paintings

講師:陳東和氏(Dr. CHEN Tung-Ho)(国立故宮博物院登録保存処副研究員)

2024年12月7日(土) フランス国立極東学院東京支部設置30周年記念、フランス国立極東学院・東洋文庫協力協定締結25周年記念 国際ワークショップ「アジア学をもとめて—東洋文庫とフランス国立極東学院の30年(1994-2024)」

主催:フランス国立極東学院、公益財団法人東洋文庫

協力:公益財団法人日仏会館、日仏東洋学会

《プログラム》

François Lachaud(フランス国立極東学院教授・研究部長・東京支部前代表)

「近代の宣教師と東アジアの宗教観—アンリ・ドレとノエル・ペリに着目して」

Martin Nogueira Ramos(フランス国立極東学院准教授・京都支部前代表)

「1880年代日本の出版物にみるパリ外国宣教会の布教活動—京都の事例を中心に」

高田時雄(東洋文庫研究員・図書部長、京都大学名誉教授)

「中國求法僧傳研究に於けるフランス東洋學の貢獻」

牧野元紀(東洋文庫研究員・文庫長特別補佐、学習院女子大学教授、司会者)

「東洋文庫100年の歩みからたどる東洋學の日仏交流」

2025年3月27日(木) 東洋文庫東アジア資料研究班公開講演会「中国の木偶戯と皮影戯」

上田 望(東洋文庫研究員・金沢大学教授)

「中国伝統芸能の現在と展望」

馬場 英子(東洋文庫研究員・新潟大学名誉教授)

「無形文化遺産登録の頃の温州市蒼南県単档布袋戯の上演、あわせて甌海区澤雅鎮の甌劇、下郷活動としての泰順県の越劇上演について」

3. 特別講演会

研究部では、東洋文庫研究員、研究班の主催によって、主として来日中の著名な外国人研究者を招いて実施した。

2024年6月23日(日)

The Heavenly Royal Lineage of Pre-medieval Eurasia: The Significance of the Middle Scythian-speaking Realms of the Silk Road, with notes on the Formation of China and the Völkerwanderung in Japan

※Christopher I. Beckwith [Indiana University]による講演会(研究部主催の英語による講演)

司会:岩尾一史(龍谷大学・東洋文庫)

共催:龍谷大学国際社会文化研究所共同研究「ヒマラヤ西部地域におけるチベットの進出とその文化的影響の歴史的研究」

2025年3月10日(月)

Toyo Bunko Workshop: CURATING WOMEN, LIFE, FREEDOM

※Pedram Khosronejad [Professor, Western Sydney University, Australia]による講演会(現代イスラーム研究班主催の英語による講演)

司会:鈴木均(東洋文庫)

コメンテーター:中村 菜穂(大阪大学)

4. 100周年記念事業シンポジウム・連続講演会

研究部では、100周年記念事業として、下記のシンポジウム、講演会を実施した。

2024年4月6日(土) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第2回)

演題:中山大學100年校慶と学術研究

報告者:謝湜(中山大學人文高等研究院院長・副学長)

司会:濱下武志(東洋文庫研究員)

2024年9月5日(木) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第3回)

演題:The Peculiar Business of Academic Publishing

講師:Dr. Paul H. Kratoska (Former Director, NUS Press)

司会:濱下武志(東洋文庫研究員)

2024年10月7日(月) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第4回)

演題:ラフカディオ・ハーンの軌跡と系譜—怪異探求から民俗学の彼方へ

講師:フランソワ・ラショウ教授(フランス極東学院)

司会:濱下武志(東洋文庫研究員)

2024年11月11日(月) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第5回)

演題: 中国古代歴史上的信息渠道—以宋代為例

講師: 鄧小南(北京大学博雅荣休教授)

司会・通訳: 妹尾達彦(東洋文庫研究員)

2024年11月16日(土)・17日(日) 東洋文庫100周年記念国際シンポジウム

“Accumulation of Asian Knowledge and East-West Exchange”

参加者数は1日目が65名(うち対面45名、オンライン20名)、2日目が64名(うち対面44名、オンライン20名)。シンポジウムの概要および講演・報告等の要旨は、2025年3月刊行のオンラインジャーナル*Modern Asian Studies Review*/新たなアジア研究に向けて、Vol. 16に掲載した。プログラムは下記のとおり。

November 16 (Sat.)

Opening Remarks: HAMASHITA Takeshi (Research Dept., Toyo Bunko)

Keynote Session. East-West Exchange of Asian Knowledge

Robert CHARD (Chair and Director, Research Centre for East Asian Cultures, St. Anne's College, Oxford)

“Regulating the Rites: Imperial Ritual Codes before the Tang”

James ROBSON (Director, Harvard-Yenching Institute)

“The Daode Jing (The Scripture of the Way and Its Virtue) and Its Curious Route to Becoming a Classic of World Religions”

Sean Hsiang-lin LEI (Director, Institute of Modern History, Academia Sinica)

“Civilization vs. Essence-Function (Tiyong): Tianyan Lun (On Heavenly Evolution) and the Birth of Science as Cultural Authority in China”

Session I. Asian Research Libraries and Asian Research Resources

Chair: Linda GROVE (Harvard-Yenching Institute; Toyo Bunko)

TAKATA Tokio (Library Dept., Toyo Bunko)

“From Morrison Library to Toyo Bunko: Expanding Traditional Chinese Book Collection”

Jidong YANG (Harvard-Yenching Library)

“East Asian Collections in American Academic Libraries: Past, Present, and Future”

MIURA Toru (West Asian Studies Grp., Toyo Bunko)

“Prospectus for Middle Eastern and Islamic Studies at the Toyo Bunko”

SHIROYAMA Tomoko (The University of Tokyo; Toyo Bunko)

“Goals and Agendas of The University of Tokyo Asian Research Library”

November 17 (Sun.)

Session II. Various Kinds of Asian Sources and New Research Methods (I)

Chair: HAMASHITA Takeshi

CHOI Chi-cheung (Xiamen University)

“Fieldwork and Archives: An Integrated Approach towards the Understanding of Communal Festivals in Hong Kong”

XU Xiaojie (Toyo Bunko)

“Decoding the Historical Memory of ‘Paper’: A Study Integrating Humanities and Sciences”

NAKATSUKA Ryo (Toyo Bunko)

“Exploring the Intertextual Origins of Fēngshén Yǎnyì Using N-Gram Text Mining”

AIHARA Yoshiyuki (Toyo Bunko)

“History and Prospects of Research Database Construction in Toyo Bunko”

Exhibition Session. Toyo Bunko’s 100th Anniversary Exhibition and Its Collections

Session III. Various Kinds of Asian Sources and New Research Methods (II)

Roundtable participants:

Linda GROVE (Chair and Presentation)

“Preserving Fieldwork Records for Future Researchers”

Matthew NOELLERT (Hitotsubashi University)

“The China Rural Revolution Dataset Series: Toward an Empirical Understanding of Early PRC Society”

Devin FITZGERALD (UCLA Library)

“From Area Studies to Global Studies: Three New Objects and Their Global Entanglements in UCLA Library Special Collections”

NAKAMURA Satoru (Historiographical Institute, The University of Tokyo)

“Technologies Supporting the Digitalization of Historical Materials”

YOSHIMIZU Chizuko (Tibetan Studies Grp., Toyo Bunko)

“Preservation and Transmission of Tibetan Cultural Heritage: The Eighty-Four Year History and New Initiatives in Tibetan Studies at Toyo Bunko”

Session IV. Long-Term Outlook: The Next 100 Years

Roundtable participants:

HAMASHITA Takeshi (Chair)

HIROSUE Masashi (Southeast Asian Studies Grp., Toyo Bunko)

KIKUCHI Chihiro (Historiographical Institute, The University of Tokyo)
KOMATSU Hisao (Central Asian Studies Grp., Toyo Bunko)
Costantino MORETTI (Ecole française d'Extrême-Orient)
UMEMURA Hiroshi (Central Asian Studies Grp., Toyo Bunko)

Closing Session.

Linda GROVE

KISHIMOTO Mio (Premodern Chinese Studies Grp., Toyo Bunko)

AOYAMA Rumi (Waseda University; Contemporary Chinese Studies Grp.,
Toyo Bunko)

HAMASHITA Takeshi

5. 東洋文庫談話会 (東洋文庫研究会)

専門分野の若手研究者による成果報告会として、東洋文庫談話会を開催した。

2025年3月2日(日) Part 1

中塚亮氏 (東洋文庫奨励研究員)

「演劇と図像から見る『封神演義』」

司会: 濱下武志氏 (東洋文庫研究員)

多々良圭介氏 (東洋文庫奨励研究員)

「医療史データベースの構築—東洋文庫医療史資料を中心に—」

司会: 濱下武志氏 (東洋文庫研究員)

2025年3月22日(土) Part 2

阿久根晋氏 (日本学術振興会特別研究員PD)

「1640年8月3日、日葡交渉の悲劇的終決?—3人のアントニオの捉え方をめぐって—」

司会: 牧野元紀氏 (東洋文庫研究員、学習院女子大学教授)

6. ミュージアムによる公開講座・イベント

普及展示部では、ミュージアム企画展に関連して、下記の講演会、ワークショップ、イベントを開催した。

<講演会>

①『近世東アジアの政治文化とキリシタン禁制』

開催日: 2024年4月14日(日)

講師: 大橋幸泰 (早稲田大学教授)

②『日本のイエズス会画派と東アジア:キリシタン美術の展開』

開催日:2024年4月21日(日)

講師:児嶋由枝(早稲田大学教授)

③『東洋文庫の逸品と近代中国史』

開催日:2024年10月5日(土)

講師:岡本隆司(早稲田大学教授、東洋文庫研究員)

④『異域を記述する一書物の東西交渉』

開催日:2024年10月19日(土)

講師:高田時雄(京都大学名誉教授、東洋文庫図書部長)

<ワークショップ>

①『東洋文庫でピラティス×ヨガ』

開催日:2024年9月21日(土)

講師:中村瑞穂(ピラティス・ヨガインストラクター)

②『見て!歩いて!古地図を楽しもう』

開催日:2024年11月10日(日)、12月1日(日)

講師:中村佳史氏(株式会社HUMIコンサルティング)

<イベント>

『ゴスペル・ピアガーデン』

開催日:2024年5月3日(金)~5月5日(日)

講師:THE DIVAS & JOYFUL VOICE SCHOOL

7. 研究情報の普及

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月DB小委員会を開催して、協同してToyo Bunko OPACシステム(<https://opac.tbopac.com/>)、学術情報リポジトリ「ERNEST」(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>。利用統計は「Iアジア基礎資料研究」p.26に既出)の管理・運営を行った。

また、Toyo Bunko OPACへの移行(2023~2027年度)が完了するまでの暫定措置として、従来の言語別・資料別の書誌データベースを統合し、2023年11月よりメインデータベース「東洋文庫図書・資料検索」としての運用を開始した。それぞれの利用統計は、次のとおり。なお集計にはいずれもGoogleアナリティクスを使用している。

2024年度「東洋文庫図書・資料検索」利用統計

<https://www.toyo-bunko.org/is/isqueryinput.php>

年月	訪問者数	1日平均	検索数	1日平均
2024年4月	914	30.5	70,190	2,340
5月	1,005	32.4	122,252	3,944
6月	927	30.9	125,244	4,175
7月	922	29.7	248,797	8,026
8月	848	27.4	153,128	4,940
9月	894	29.8	218,156	7,272
10月	985	31.8	191,720	6,185
11月	955	31.8	185,768	6,192
12月	1,082	34.9	197,034	6,356
2025年1月	828	26.7	181,852	5,866
2月	728	26.0	158,097	5,646
3月	884	28.5	216,494	6,984
合計	10,972	30.1	2,068,732	5,668

2024年度 Toyo Bunko OPAC 利用統計

<https://opac.tbopac.com/>

年月	訪問者数	1日平均	検索数	1日平均
2024年4月	162	5.4	275	9
5月	170	5.5	325	10
6月	179	6.0	300	10
7月	179	5.8	292	9
8月	174	5.6	266	9
9月	133	4.4	283	9
10月	177	5.7	248	8
11月	162	5.4	254	8
12月	170	5.5	239	8
2025年1月	148	4.8	222	7
2月	145	5.2	239	9
3月	150	4.8	268	28
合計	1,949	5.3	3,211	9

Toyo Bunko OPACへの移行作業は2025年3月末現在、全体の約51%に達した。現時点では移行途中のため、総データ数は「東洋文庫図書・資料検索」に未だ及ばず、利用者数は多くないが、今後、移行作業の進展とともに利用者数も増加していくものと予測している。

8. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書を刊行した。

『東洋文庫年報』2023年度版

オンライン版(公開)

<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/records/2000431>

B. データベース公開

図書部が中心となり、アジア基礎資料研究に取り組む研究班・研究グループと協力して、洋装本漢籍等の書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図等の画像データのデジタル化を進めると同時に、梅原考古資料の未公開部分のデジタル化公開に向けたメタデータ作成に取り組んだ。

2021年1月にNACSIS-CAT準拠のOPACシステム「Toyo Bunko OPAC」をオンプレミス形式からクラウド形式に移行したことを受け、2023年度より5年計画で、現行の書誌データベースの約28万件の書誌データをToyo Bunko OPACに移行する計画を立案した。2024年度は、100周年記念事業として外注による遡及入力作業を進めるとともに、新着資料のOPAC・CiNiiへの登録を開始した。漢籍については、当面Toyo Bunko OPACへの移行は行わず、「全国漢籍データベース」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>)との連携に取り組む計画を立てた。

C. 海外交流

各部協同して、フランス極東学院および台湾中央研究院（歴史語言研究所・近代史研究所）、ハーバード・エンチン研究所、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、ロンドン大学SOAS図書館、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センター、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所、国際テュルク・アカデミー、吉林師範大学満学研究院との学術交流を進め、資料情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。また、カザフスタン東洋学研究所との間で新たに学術交流協定を締結した。



ハーバード・エンチン研究所

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材の育成に共同で取り組んだ。

世界各地のアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者と協力して、対面、あるいはオンライン形式によって、国際シンポジウム・ワークショップ・研究会等を通じた国際学術交流を推進した。

V. 学術情報提供

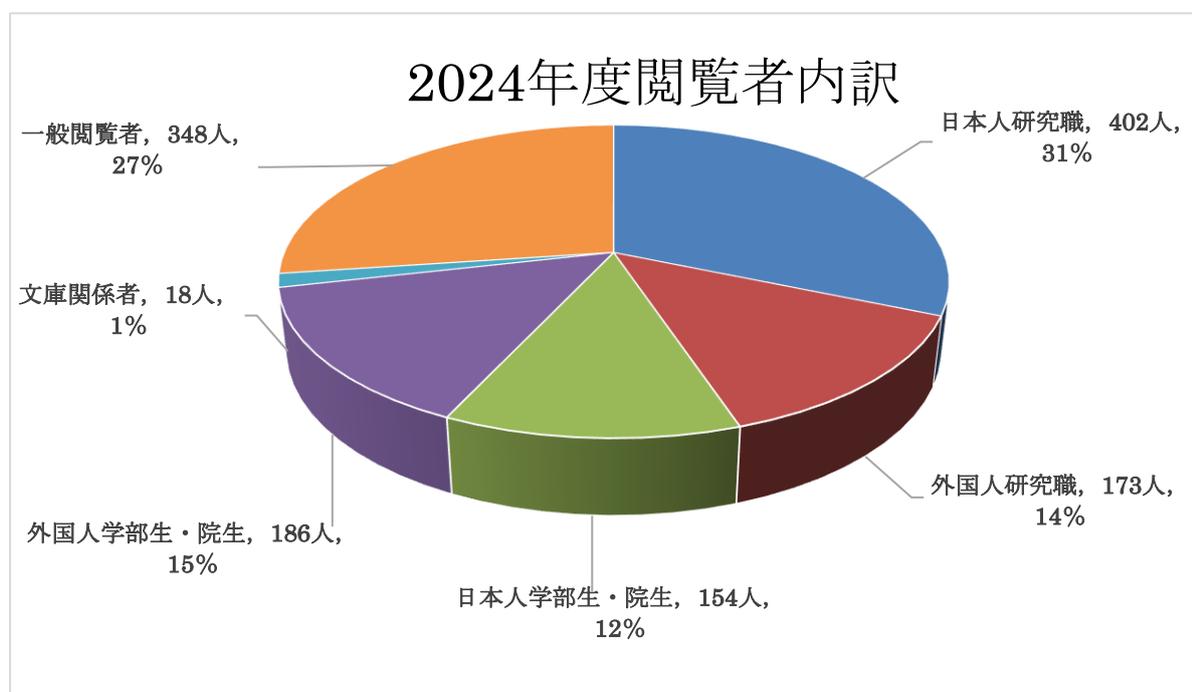
東洋文庫は、日本における東洋学にかかわる共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

図書部では、広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
研究員の書庫利用	26人	22人	14人	34人	27人	29人
閲覧者人数	84人	113人	106人	123人	150人	116人
閲覧図書数	1,916冊	1,874冊	3,572冊	2,755冊	3,921冊	2,119冊
レファレンス数	23件	31件	29件	33件	41件	32件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
24人	34人	25人	13人	23人	24人	295人
96人	117人	135人	84人	102人	55人	1,281人
1,343冊	1,935冊	1,155冊	1,495冊	1,668冊	1,722冊	25,475冊
26件	32件	37件	23件	28件	15件	350件



B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
70	0	360	42

(2) 電子複写

申込件数	提供枚数
437	12,665

C. 情報提供サービス

研究部では、刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

普及展示部では、広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし（中学生程度の歴史知識を前提）、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

2024年度は下記の展覧会を開催し、各企画展において図録を発行した。加えて、100周年記念図録を発行した。また、東洋文庫の資料を展示する巡回展『知の大冒険-東洋文庫 名品の煌めき』を下記の期間、施設で開催した。

〈企画展〉

①『キリスト教交流史-宣教師のみた日本、アジア-』

会期:2024年1月27日(土)~5月12日(日)

入場者数:15,056人

②『アジア人物伝』

会期:2024年5月25日(土)~8月18日(日)

入場者数:11,255人

③『知の大冒険-東洋文庫 名品の煌めき』

会期:2024年8月31日(土)~12月26日(木)

入場者数:27,816人

〈テーマ展〉

「人物でふりかえる東洋文庫100周年」

〈巡回展〉

石川県立歴史博物館

会期:2024年7月19日(金)~9月1日(日)

5. 入場者数

2024年4月1日~2024年12月26日における、ミュージアム総入場者数は、以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
入場者数	3,565	4,354	3,545	3,809	3,177	4,355	5,556	7,127	10,625

計
46,113

E. ホームページリニューアル

蔵書、展示、刊行物、講座、イベントなど、ユーザーが目的に応じて東洋文庫の必要な情報を簡単に見つけられ、アクセスしやすいホームページを作成し、2024年4月1日から公開した。これにともない、オンラインショップの利便性も高まり、東洋文庫への来館が難しい方に対する学術情報提供(図録の販売等)をより活発に行えるようになった。

F. 普及広報

普及展示部では、東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、一般認知度を高めるためのメディアへの情報提供として、企画展内覧会の開催や広報物の発送、ホームページの随時更新、SNSでの告知などを積極的に行った。また、東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる。

新聞、雑誌、WEB：『日本経済新聞』、『朝日新聞』、『中央公論』、『東京人』、
『mitsubishi.com』など
テレビ：フジテレビ『有吉くんの正直さんぽ』など

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして、『東洋見聞録』を発行・頒布した。

3. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信した。

4. 小学生・中学生・高校生・大学生向けの学習支援・普及活動

- ・東京藝術大学との協力協定により、同学彫刻科の卒業作品から一作品を選出して「東洋文庫賞」を授与し、東洋文庫敷地内のオープンスペースにて作品を展示した。
- ・スクールパートナーシップを締結している東京都立小石川中等教育学校第1学年160名の見学会を、2024年5月1日に実施した。
- ・下記の日程で、小学校、中学校、高校、大学の学生にレクチャー、展示解説をまじえた見学会を実施した。
新潟県系魚川小学校6年35名(7月5日)、千葉県富里市内の小学5,6年生6名(7月31日)、東洋英和中高部12名(10月2日)、防衛大学31名(11月29日)
- ・キャンパスパートナーシップを締結している青山学院大学の学生1名、淑徳大学の学生2名を7月23日~7月31日、東洋大学の学生1名を11月20日~11月28日の期間で、それぞれ学芸員実習生として受け入れた。
- ・11月29日、筑波大学附属視覚特別支援学校中学3年生3名の職場体験を受け入れた。

5. 東洋文庫アカデミア

東洋に関する歴史、文学、美術、音楽、宗教、政治、経済、文化、社会、語学、図書館学、

博物学等の広い分野を対象として、東洋文庫の持つ、図書・研究・普及の活動を総合し、一般向けの生涯学習講座「東洋文庫アカデミア」を実施し、ベテラン研究員による研究成果の普及とともに、若手研究者が講師経験を積む場として活用した。

コロナ禍をひとつの契機として、「オンライン講座」を実施し、遠隔地在住の講師・受講者の参加を推進しつつ、対面での講座を開催した。開講講座は下記のとおり（表中の人数は、延べ人数を記した）。

講座名	講師(所属)	期間	回数	人数
明治維新 10 講 ※対面開催	三谷 博（東洋文庫研究員、東京大学名誉教授）	2024 年 4 月 17 日 ～2025 年 2 月 19 日	10	11 7
毛沢東論 10 講 毛沢東と現代中国：真理は天から降ってくる毛沢東的世界の探求 ※対面開催	中兼和津次（東京大学名誉教授・東洋文庫研究員）	2024 年 5 月 25 日 ～2025 年 3 月 29 日	10	97
考古学から見る西周王朝 ※対面開催	飯島 武次（東洋文庫研究員、駒澤大学名誉教授、元日本中国考古学会会長）	2024 年 5 月 18 日 ～2024 年 7 月 13 日	5	13
水墨画講座（初級） ※対面開催	伊藤 忠綱（二松学舎大学講師）	2024 年 5 月 18 日 ～2024 年 7 月 20 日	5	36
中国宋代の事件簿—判決文集『清明集』の世界 ※対面・オンライン開催	戸田裕司（常葉大学教授）、小島浩之（東京大学講師）、佐々木愛（島根大学教授）、石川重雄（東洋文庫研究員）、大澤正昭（東洋文庫研究員）	2024 年 8 月 24 日 ～2024 年 9 月 21 日	5	66
書道入門（初級） ※対面開催	神野 雄二（大光）（熊本大学名誉教授）	2024 年 9 月 6 日 ～2024 年 12 月 20 日	8	33
ヴェトナムのカトリック教会堂巡礼 ※対面開催	高木 繭絹子(Huyensy 代表 博士(学術))	2024 年 9 月 28 日 ～2024 年 10 月 26 日	3	10
中国医学史散策：張仲景の〈治療世界〉 ※オンライン開催	角屋 明彦（明治大学法学部非常勤講師）	2024 年 10 月 3 日 ～2024 年 10 月 17 日	3	78
江戸歌舞伎を紐解く ※対面開催	木村 涼（岐阜女子大学・特任准教授）	2024 年 11 月 7 日 ～2024 年 11 月 28 日	4	7
考古学から見た東周時代以前の秦文化 ※対面開催	飯島 武次（東洋文庫研究員、駒澤大学名誉教授、元日本中国考古学会会長）	2024 年 11 月 16 日 ～2024 年 12 月 14 日	3	26
イランの芸術 ペルシア書道に親しむ「筆筆で書いてみる」 ※対面開催	角田 ひさ子（イラン文化センター講師）	2025 年 1 月 10 日 ～2025 年 3 月 21 日	6	30
「お隣」のムスリム（イスラム教徒）とつきあう ※対面開催	松本 高明（世田谷学園非常勤講師）、智野 豊彦（横浜市立東高等学校教諭）	2025 年 3 月 8 日 ～2025 年 3 月 29 日	4	39

G. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院および中央研究院の歴史言語研究所・近代史研究所（台湾）、ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、アレキサンドリア図書館（エジプト）、イラン議会図書館、ロンドン大学SOAS図書館（イギリス）、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所（ドイツ）、国際テュルク・アカデミー、カザフスタン東洋学研究所（カザフスタン）、吉林師範大学満学研究院（中国）、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センターと協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。

H. 研究者の交流および便宜供与のサービス

I. 長期受入

(1) 外国人研究員の受入

フランソワ・ラショウ（フランス国立極東学院 東京支部長）

「近世日本の美術史・宗教史（蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等々）」

「近世期の東アジアの交流史（日本・中国・ロシア・西欧）」

（2017年3月15日～2024年8月31日）

コスタンティーノ・モレッティ（フランス国立極東学院 東京支部長）

「仏教の文物とそれを支える物質：中世中国・日本における仏教の生成と普及」

（2024年9月1日～2026年6月30日）

陶 徳民（関西大学名誉教授・関西大学東西学術研究所研究員）

「近世近代日本漢学思想史・近代東アジア文化交渉史」

（2021年9月1日～2025年8月31日）

[受入研究員：斯波 義信]

朱 蔭貴（上海復旦大学歴史学部名誉教授・博士課程指導教授）

「中国経済史研究」

（2023年8月1日～2024年7月31日）

[受入研究員：濱下 武志]

李 培徳（華僑大学華僑華人与区域国別研究員特聘教授、早稲田大学商学学術院訪問学者、日本学術振興会外国人研究者）

「20世紀中国銀行家階級的興起と日本の関係」

（2024年3月20日～2025年3月19日）

[受入研究員：濱下 武志]

Ronald Edwards（台湾淡江大学・経済学部・准教授）

「China, Japan and the Rise of the West: Gunpowder, the Military, the State」

and Modernization」

(2024年6月28日～2024年9月2日)

[受入研究員:斯波 義信]

ガザンジェ(青海民族大学・民族学与社会学学院・副教授)

「東洋文庫の1960年代から2000年までのチベット研究班の研究成果の資料収集」

(2024年7月18日～2024年8月16日)

[受入研究員:濱下 武志]

馬 軍(上海社会科学院・歴史研究所・研究員)

「東洋文庫所蔵の日中学術界交流に関わる文献の調査」

(2024年10月20日～2024年11月21日)

[受入研究員:濱下 武志]

Jeffrey KOTYK (Postdoctoral Fellow, Max Planck Institute for the History of Science)

「Astrology and Cosmology in Premodern East Asia (古代東アジアにおける占星術と宇宙論)」

(2025年2月17日～2025年3月3日)

[受入研究員:牧野 元紀]

(2) 2024年度奨励研究員の任用

・中塚 亮[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。2022 年度より科学研究費基盤研究(C)「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」の研究課題に取り組んでいる。

・多々良圭介[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者

※2022～2024 年度槇原研究奨励金受給者

研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。2022 年度より科学研究費基盤研究(C)「19 世紀末-20 世紀初中国の感染症流行の構造解析-感染症流行年表の制作を中心に-」の研究課題に取り組んでいる。

・魏 郁欣[継続] ※2021～2023 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。

・速水 大[継続] ※2021～2023 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「敦煌吐魯番出土文献と唐代均田制」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに中央アジア研究班の研究活動に参画した。

- ・河野 敦史〔継続〕 ※2023～2024 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「現代ウイグル語訳『ターリーヒ・ハミーディー』の「序章」に見られる歴史叙述に関する検討—現代ウイグル語資料の活用促進に向けて—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代ウイグル語図書資料の整理とデータベース化作業に参画した。
 - ・島田 大輔〔新規〕 ※2024 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「天津租界の日本語雑誌『日華公論』に関する基礎的研究—「日華文化提携」の実相—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代中国研究班の研究活動に参画した。
 - ・鈴木 航〔新規〕 ※2024 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「国民政府期中国におけるメディア空間の拡大」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに近代中国研究班の研究活動に参画した。
- ※奨励研究員の任期は、3 カ年度以内。3 カ年度の受入期間終了後は、1 カ年度ずつ、最大 3 回まで更新可。
- ※斯波研究奨励金・榎原研究奨励金の給付期間はそれぞれ 1 年間。選考委員会による延長審査に合格した場合は、1 年間ずつ、最大 3 年間まで給付期間が延長される。

(3) 「斯波研究奨励金」の給付

2018年度に斯波義信文庫長のご寄付によって設立した特定資産「斯波研究奨励基金」と「斯波研究奨励金制度」により、2024年度、東洋文庫奨励研究員を対象に募集・選考を行い、3名（新規2名、延長1名）に対して研究奨励金年額各50万円を給付した。

(4) 「榎原研究奨励金」の給付

2022年2月、第12代理事長榎原稔氏（1930～2020）のご遺族からの寄付金を基金化して特定資産「榎原研究奨励基金」を設立した。これを発足原資として、ハーバード・エンチン研究所をはじめ、東洋文庫と学术交流協定を締結する海外研究機関が取り組む「ビジュアル資料の保存・デジタル化・展示・公開・研究活用と、若手研究者の育成、および国際交流事業の推進」を目的に、給付型奨励金「榎原研究奨励金制度」を導入した。2024年度は、東洋文庫の奨励研究員、研究部運営委員、ハーバード・エンチン研究所関係者に周知し、東洋文庫奨励研究員1名に対して研究奨励金年額50万円を給付した。

2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行った。

China	謝湜〔中山大学人文高等研究院院長・副学長〕（他6名） 行龍〔山西大学教授〕 陳軍亜〔華中師範大学中国農村研究院院長〕 施均顕〔広西壮族自治区地方志編纂委員会辦公室 古籍整理部部長〕
-------	---

(他5名)

魏崇[中国国家図書館副館長]他4名

何彬[南京農業大学教授]

王師師[上海市地方志弁公室主任科員](他1名)

金以林[中国社会科学院近代史研究所副所長](他3名)

陳紅民[浙江大学教授]

蔡志祥[厦門大学教授]

England Robert Chard[オックスフォード大学セント・アンズ・カレッジ教授]

France Pietro De Laurentis[広州美術学院]

Germany Elisabeth Kaske[Leipzig University 教授]

Hong Kong 楊之水[香港中文大学歴史学系博士課程学生](他1名)

India Tenzin Gyurmey[南インドセラ寺院僧侶](他1名)

Kazakhstan Duken Masimkhanuly[カザフスタン東洋学研究所長](他2名)

Korea 尹徳敏[駐日韓国大使](他3名)

Taiwan 陳文松[成功大学歴史学部教授]

呂紹理[台湾大学歴史学系教授](他1名)

劉龍心[東呉大学歴史学系教授]

雷祥麟[中央研究院近代史研究所所長]

周瑞坤[国立台湾図書館企画推進課課長]

USA Yan Hon Michael Chung[Harvard Yenching Library館長](他1名)

Hong Cheng(程洪)[UCLA東アジア図書館]

James Robson[ハーバード・イェンチン研究所所長]

Barak Kushner[ケンブリッジ大学教授]

以上

2024 年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 畔柳 信雄

2024年4月1日から2025年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 基盤研究(A)の対象事業

「漢文大蔵經の文献学的研究基盤の構築：『大正新脩大蔵經』底本・校本DBの活用と拡充」

[研究代表者：會谷 佳光]
(2021 年度採用、5 ヶ年・第 4 年度)
※新科研採択のため本年度で終了

2. 基盤研究(B)の対象事業

「日本近世史料学の再構築—基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」

[研究代表者：杉本 史子]
(2022 年度採用、3 ヶ年・最終年度)

「インドシナ農村の社会経済構造から見る脱農化と帰農化の現代史」

[研究代表者：高橋 昭雄]
(2022 年度採用、4 ヶ年・第 3 年度)

「連歌総目録の補完と新システムの構築に関する研究」

[研究代表者：深沢 眞二]
(2023 年度採用、3 ヶ年・第 2 年度)

3. 基盤研究(C)の対象事業

「三上次男考古・美術資料の研究とデータベースの作成」

[研究代表者：金沢 陽]
(2018年度採用、4ヶ年・最終年度(再々延長))

「日本国内所蔵敦煌写本古写真の整理研究」

[研究代表者:高田 時雄]
(2020 年度採用、4 ヶ年・最終年度(延長))

「人文情報学の手法によるイスラーム都市社会の人的ネットワークの研究」

[研究代表者:三浦 徹]
(2022 年度採用、4 ヶ年・第 3 年度)

「1930~50 年代児童雑誌における「学習マンガ」ジャンルの形成に係る実証的研究」

[研究代表者:瀧下 彩子]
(2022 年度採用、3 ヶ年・最終年度)
※2025 年度に期間延長

「19 世紀末-20 世紀初中国の感染症流行の構造解析—感染症流行年表の制作を中心に—」

[研究代表者:多々良圭介]
(2022 年度採用、3 ヶ年・最終年度)
※2025 年度に期間延長

「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」

[研究代表者:中塚 亮]
(2022 年度採用、3 ヶ年・最終年度)
※2025 年度に期間延長

「喪葬用文物よりみた、中国古代における死生観・冥界観の展開に関する基礎的研究」

[研究代表者:関尾 史郎]
(2024 年度採用、3 ヶ年・初年度)

4. 若手研究の対象事業

「近代日本のイスラーム政策における戦前・戦後期の連続性／非連続性に関する基礎的研究」

[研究代表者:島田 大輔]
(2019 年度採用、3 ヶ年・最終年度(再々延長))

B. 三菱財団研究助成による事業

1. 人文科学研究助成

「近現代ウイグル人社会における歴史叙述の変容：民族語文献からの検討」

[研究代表者：新免 康]

(2024年10月より1年半)

「近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究」

[研究代表者：小松 久男]

(2024年10月より1年)

以上